



発掘調査報告書

常楽寺古墳

1985.2

島根県

仁多町教育委員会

常 樂 寺 古 墳



(扇を捧げ持つ巫女)

- 1985.2 -

仁多町教育委員会

はじめに

仁多町郡村は郡家（律令時代に地方官が在勤した役所）の所在地で古くから栄えた土地として注目されてきたところです。

先年、圃場整備に伴って「カネツキ免遺跡」から円面鏡・墨書き土器や木製生活用品が出土し世の耳目を集めたのですが、このたび隣接した南側を圃場整備工事中昭和58年6月人物埴輪の頭部を出土しました。

仁多町は島根県教育庁文化課の指導を得ながら、該当地を買収し、町教育委員会は、国庫と県の補助を得て昭和59年8月から発掘調査を行い、人物・馬・円筒等の埴輪破片多数を採取しました。9月から本年1月まで成果の取りまとめとこれらの復元作業を試みました。資料価値は今後の精密な検討総合判断に俟つとしても、可成り貴重な資料に間違いないものと思われます。殊に、奥出雲郡村の地に忽然として多様な埴輪を有する古墳が出現したことについて知れぬ興味を持つものであります。本書はこの調査の成果報告でありますが、地域の歴史を知る上で貴重な資料になるものと思います。更にひろく古墳文化解明の一端に寄与できれば、望外の幸であります。

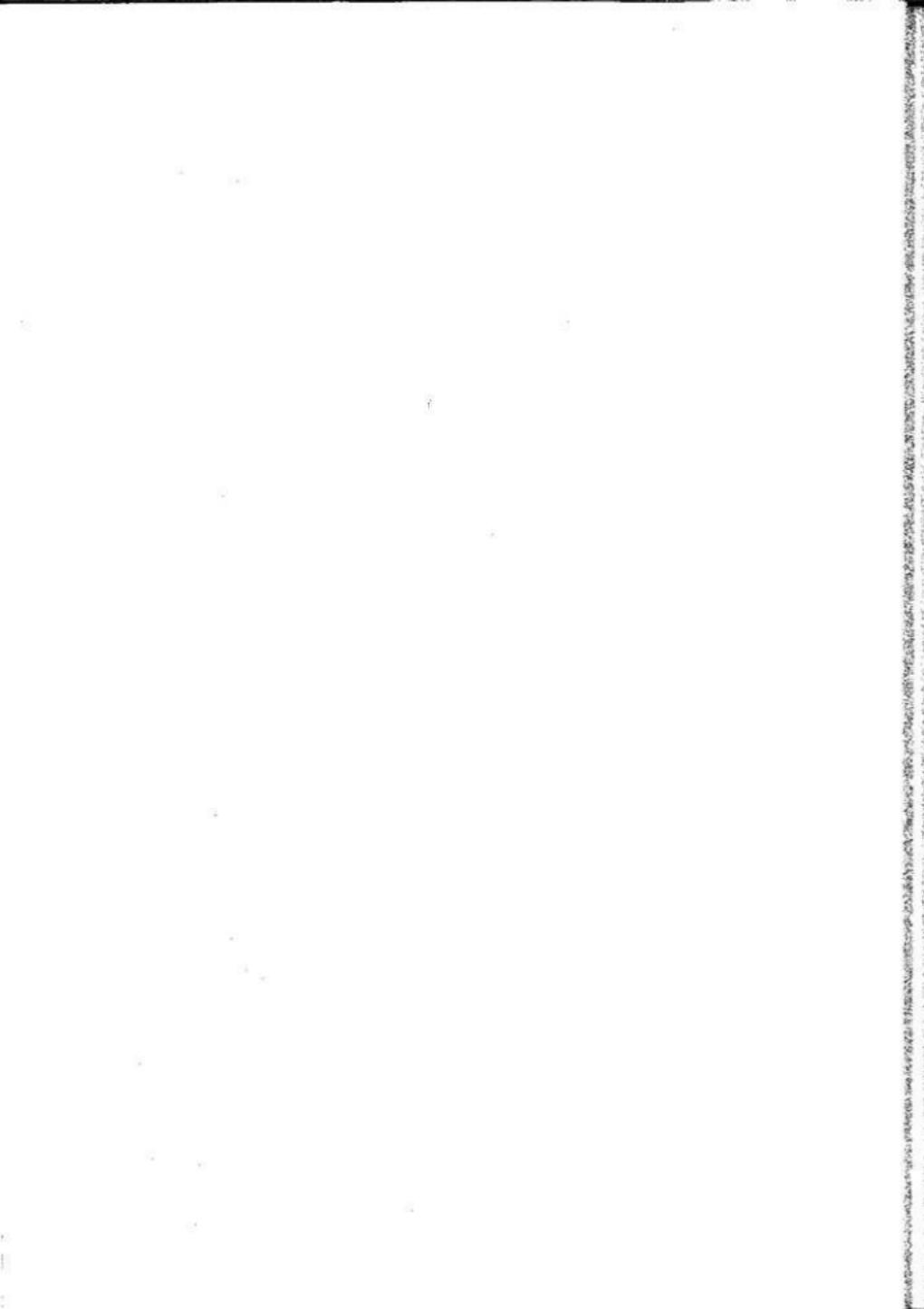
巻頭には山本清先生から格別の御寄稿を賜り、一層意義あるものとなりましたこと深く感謝致します。

本調査実施に当りご指導下さった島根大学名誉教授・山本清先生、並びに島根県教育委員会はじめ、その他関係各位のご協力と、ご援助を得ました。ここに衷心から厚くお礼を申し上げます。

昭和60年2月

仁多町教育委員会

教育長 藤原成章



地域の様式としての常楽寺古墳

島根大学名誉教授 山 本 清

仁多郡仁多町の常楽寺古墳は、形象埴輪片の発見に端を発し、発掘調査が実施され、なお多量に残っていた埴輪片の詳細な遺存状態、削平され僅かに残る墳丘の検討がなされ、主体たる横穴式石室の内部は調査されなかったが、玄室の概要も一応明かにされた。さらに多数の埴輪の細片も復原されて、ほぼ概形が判明するにいたった。

このことは、単に多数ある中の一古墳の概要が判明したというだけでなく、それは地方当代の歴史を考えるのに重要な標識になると思われる所以である。

仁多郡は、雲南三郡の中では横穴式石室の遺存例は目立って多いが、その中でも当仁多町に顕著なものが多い。八代の穴観音古墳、上鶴倉才ノ神の二古墳（穴観1号墳・同2号墳）三成の郡屋敷古墳、常楽寺古墳に近い高田の岩屋古墳、琴枕の古墳などはそれである。これらに比し、常楽寺古墳は、墳丘、石室とも、その規模はそう大きくないが、石室は玄門部の両側に柱状の石を配し、その上に棺石（まぐさいし）を置いた整った構造であることが注意される。

この古墳について、もっとも注目されるのは、調査の発端ともなった埴輪、とくに形象埴輪で、人物は松江市岩屋後と並ぶ山陰の著例であり、馬形も稀少例である。出雲国内で形象埴輪出土の知られたものは10カ所もなく、それらはすべて北部の平原地帯に限られ（この点伯耆も同様）円筒埴輪も雲南三郡には発見例がない。発見例の多少は調査の精耕にもよるのであるが、おのずから、およそその実情を反映していることは争えない。

のことから推して、常楽寺古墳の築造主体は、この地方では容易に用い得なかった珍品を獲得できる立場にあったことを示すのであり、古墳の規模は目立たないにもかかわらず、余程の実力をもつ存在であったことも推測される。

さて、のち奈良時代になると、このあたりは今の能義郡の比田方面をも含めて「三处郷」であり、仁多郡家も郷内にあり、今の「郡村」にその名残りを留めている。郡内の地理的位置からいえば北に偏しているが、備後、伯耆の日野郡に行く道の分岐点という交通上の要地であることも考慮されるが、八世紀末ごろとも見得る立派な瓦の出土した高田廃寺も地元豪族の建立とすれば、古墳時代以来このあたりが、郡内でも支配的な有力者の居所で

あったことも考えられ、ここに郡家を置く素因となったとも考えられよう。

なお、人物埴輪のうち、珍らしいズボン形の着装をした男子像の形は、岡山県赤磐郡熊山町出土品に類似するが、このような服装や表現手法の特徴から、今後工人集団の系統や、ひいては工人集団の社会的な存在形態など、単に山陰の一地方の問題でなく、古代史上の重要問題にも課題を投げかけることにもなろうか。

例　　言

1. 本書は島根県仁多郡仁多町大字高田、郡村塚田に所在する「常楽寺占墳」の発掘報告書である。
2. 調査は発見に伴って仁多町が行った昭和58年度と、国及び県の補助を得て行った昭和59年度の2ヶ年にわたるもので、調査体制は次のようにある。

- | | | |
|-------|------|-------------------------|
| 調査主体者 | 藤原成章 | 仁多町教育委員会 教育長 |
| 調査指導者 | 山本 清 | 島根大学名誉教授・島根県文化財保護審議会副会長 |
| | 池田満雄 | 島根県文化財保護審議会委員 |
| | 蓮岡法瞬 | 島根県教育委員会文化課 課長補佐 |
| 調査担当者 | 杉原清一 | 島根県文化財保護指導委員・日本考古学会員 |
| 調査補助員 | 藤原友子 | (飯石郡三刀屋町) |
| 事務局 | 恩田重夫 | 仁多町教育委員会 教育次長 |
| | 川木健二 | 〃 社会教育主事 |
3. 本書の撮影・執筆は指導を得て杉原が行い、測図・写真は蓮岡と杉原によるもので、添写は藤原が行った。
4. 掘出の方位は実測時の磁北による。土色の表示は J I S 「標準土色帳」(農林水産技術会議)に準拠した。
5. 卷頭には山本清先生から広い視野からの特別寄稿を得て、本書に光彩をそえていただいた。
6. 調査の実施及び遺物の検討にあたって多くの方々から教示、協力、援助をいただいた。記して謝意を表する。

勝部 昭	松本岩雄	門脇俊彦	平野芳美	本間恵美子	風土記の丘資料館
藤原 実	杠 政義	仁多を知る会(郡内教職員学習の会)			仁多町中央公民館
石原 靖	石原久夫	植田義光・他地元自治会	高田小学校		
石原工務店	植田岩夫	藤原愛子	藤原チエ子	賀元ひろみ	高田小・三成小児童

目 次

表 紙	遺跡全景と人物埴輪
内 表 紙	*卵を捧げ持つ巫女、
はじめに	仁多町 教育長 藤原成章
巻頭寄稿	島根大学名誉教授 山本 清
例 言	
I 調査に至る経緯と調査経過	川本健二 1
II 位置と環境	杉原清一
1. 位置	3
2. 歴史的環境	3
III 古墳について	杉原清一
1. 主体部	7
2. 墳 丘	8
3. 遺物の出土状況	14
IV 出土遺物について	杉原清一
1. 古墳築造以前の出土遺物	18
2. 須恵器	20
3. 円筒埴輪	21
4. 馬形埴輪	27
5. 人物埴輪	30
V ま と め	連岡法師・杉原清一 39

挿入図表目次

図1 周辺遺跡分布図	4	図13 円筒埴輪(1)	22
2 風土紀時代の山型	4	" (2)	23
3 周辺遺跡資料図	5	" (3)	24
4 遺跡周辺地形図	6	14 馬形埴輪	28
5 遺跡平板図	7	15 " 破片	29
6 石室実測図	9~10	16 男子 I 号・II号埴輪	31
7 トレンチ実測図	11~12	17 男子 III 号埴輪	32
8 A区補助トレンチ図	14	18 女子 I 号・II号埴輪	34
9 遺物出土状況	15	19 馬形・人物埴輪破片	35
10 接合復元破片分布状況	16		
11 繩文・弥生式土器剖面図	19	表1 出土遺物集計表	17
12 須恵器測図	20	2 円筒埴輪觀察表	25~26

図版目次

PL1 1. 遠景		PL5 1. A区出土状況 第二次取上げ	
2. A区発掘前状況		2. 人物埴輪出土状況	
3. 近景		3. A区出土状況 第三次取上げ	
PL2 1. 発掘作業		PL6 1. 円筒埴輪	
2. 石室玄門部		PL7 1. 馬形埴輪	
3. 遺物検討		2. " 破片	
PL3 1. A・B区表土除去		PL8 1. 男子 I 号埴輪	
2. 人物埴輪出土状況		2. " II号埴輪	
3. A区出土状況 床層下面		3. 人物埴輪破片	
PL4 1. A区出土状況 第一次取上げ		PL9 1. 女子 I 号埴輪	
2. 向上 部分		2. " II号埴輪	
3. 向上		PL10 1. ハケ目 男子 I 号埴輪	
		2. " 女子 " "	
		3. " 円筒埴輪 No1	

位 置 図



I 調査に至る経緯と調査経過

常楽寺古墳は、高田地区圃場整備事業に先立って、昭和55年5月11日地区内の分布調査が行われた際に確認し、周知の遺跡として取り扱われたものである。古墳の周辺は除地することとして圃場整備事業が昭和58年から開始された。同年6月15日露出していた石室から約10m離れた位置で、人物埴輪や円筒埴輪の破片が多数発見された。

そこで仁多町教委は直ちに出土地を中心とする約20m四方について工事を中止して、関係者とその取扱いを協議した。その結果埴輪等の分布実態と古墳の範囲（墳丘の裾線）の確認が必要であるということから、第1次発掘調査を8月1日から11日まで、県文化課の援助を得て行った。

- S. 58 8. 1 作業開始
2 レンチ設定、発掘開始 A・B レンチ
4 C レンチ発掘
9 現地説明会、地元の人々はじめ50名以上の参加を得た
11 A レンチ埴輪等取り上げ 第1次調査終了
9. 2 遺跡買上げのための範囲確定

この調査で本古墳の重要性が確認され、石室を中心とする475m²の範囲を町で買い上げ、保存することに至った。このことはとりもなおさず文化財に対する地域の人々の关心を高めることになった。
そして本年度の調査は、国庫と県の補助を受けて仁多町教育委員会が主体となって実施した。

- S. 58 8. 4 第2次調査開始 C レンチを延長Cとする D・E レンチ設定
8 F レンチ設定 発掘
9 石室実測開始
20 A レンチ発掘・雨覆設置
24 B レンチ発掘
27 現地指導会（遺構の検討と今後の作業計画について）
28 第2次埴輪取り上げ その下部の発掘
29 第3次 ノ 人物頭部2個検出 補助レンチ設定
30 石室玄門部附壁部発掘 B・D レンチ掘り下げ
31 埋戻し 現場作業終了
9. 1 出土品洗い

9. 4 出土品注記作業
7 接合作業開始
10. 26 指導会（調査成果の検討）
30 男1号人物1体分ほとんど接合できる 町内公開準備
11. 24 墓輪実測開始

この整理作業は、今後の完全復元を考慮しながら必要最少限にとどめたが、復元できたのは馬、人物埴輪、円筒埴輪、須恵器等である。

この整理作業中の11月3日からの仁多町文化祭において、常楽寺古墳出土品速報展を設け、2千余人に及ぶ町民に展示発表する機会を設けた。この反響は大きく、昨年の現地説明会に続き町民の埋蔵文化財に対する関心を高めた。

なお、現場は揮場整備事業の残土（真砂土）で59年12月から翌年2月にかけて調査前の状態に埋め戻して保存することにした。

この調査結果を踏まえ、今後の保存・活用に整備を含めて検討中である。

なお、本調査に関して各方面からご指導、ご援助をいただいた。

（川本健二）

II 位置と環境

1. 位置 (図1)

本古墳は、仁多町役場のある三成盆地の北東約4.5kmの高田の小盆地に所在する。この盆地北西の丘陵裾部にあたり、ほぼ中央を流れる郡川の大きく迂曲する位置の西側河岸段丘上に営まれたもので、かなり古くから水田になっているところである。

細かくみれば、北西には張り出した丘陵の実端があり、その麓の一群の宅地を経て水田面に至り、微高地形の水田が川の屈曲点へと続いている。この微高地形水田面のほぼ中央に本古墳が築かれており、標高は332.5mである。

この部位の自然地層は、粗粒の川砂層の上に黒色土(クロボク土)が厚く堆積していて、その上面が水田の耕作土となっている。

2. 歴史的環境 (図2)

仁多町は古く縄文時代前期以降の多数の遺跡が散在し、山陰と山陽の中間に位置する山間地であり、陰陽の文化交流の接点的立地でもあることから、山陰平原部のみならず山陽地方の影響を受けた特徴の遺跡も多い。

(1) 「出雲國風土記」は仁多郡衙とその位置について次のように述べている。

「東南道、自(大原)郡家去廿二里一百八十二步、至郡東南界比理村、又東南一十六里二百卅六步、至仁多郡家、分為二道。一正東道、一正南道。正東道卅五里一百五十步、至伯者國界阿志毗鄰山、又南道卅八里一百廿一步、至佛後置塙遊託山」また仁多郡の条に「三处郷、即屬郡家………」とある。

この仁多郡家の位置は今日、仁多町大字高田・郡字大領原に比定されている。付近には大領神社や高田寺跡、岩屋古墳、カネツキ免遺跡等多くの遺跡が集中している地域である。また墨書き器の出土した家の脇遺跡は本古墳に最も近い。

このように、本古墳のあたりは古墳時代から平安時代にかけての特色ある遺跡が多く、これらの時代にも、隣国から山越して出雲国への入口部にあたり、また仁多郡治の中心地として山間地ながら栄えた土地柄であったと思われる。

以下主要な遺跡についてその概要を記す。(図3)

(1) 岩屋古墳⁽²⁾：丘陵突端部に築いた古墳で、直径約15mの円墳とみられる。主体部は横穴式石室で、全長約7m、玄室長2.65m、同幅2.1m、同高さ1.9mを測る。その形態は奥に細長く、両側壁沿いに柱状石を立てて玄門とし、両袖形式にしている。玄室は各壁面と天井をそれぞれ一枚の

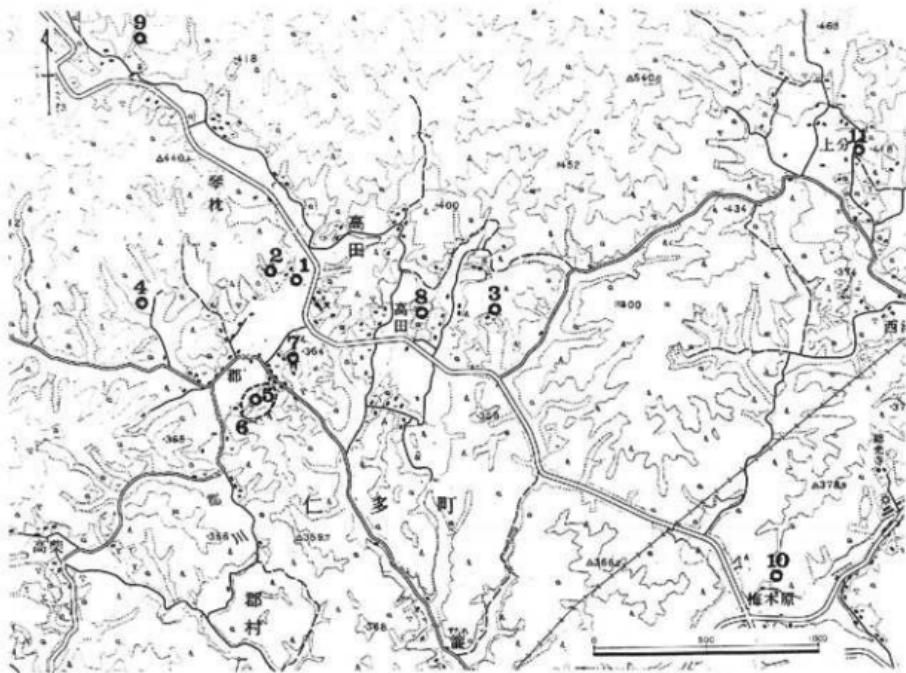


図1. 周辺遺跡分布図

出雲国風土記要図



1. 常楽寺古墳
2. 家の脇
3. 岩屋古墳
4. カネツキ免遺跡
5. 仁多郡家跡の碑
6. 大領原
7. 大領神社
8. 高田廃寺
9. 孝枕古墳
10. 梅木原古墳
11. 上分中山横穴

図2. 風土記時代の出雲

(加藤義成: 出雲国風土記要図 S 32年より)

巨石を用い、羨道は両壁と天井を各2枚の大石で築いている。遺物は不明であるが、石室の形態から7世紀前半ごろとされ、仁多郡内所在の横穴式石室では群を抜いて大きく、その築造方法も玄門を有するなど、他とは著しく様相を異にする。

(2) 高田庵寺⁽³⁾：丘陵の斜面に構えられた奈良時代の寺院跡。所在地は大字高田字本堂。40m×10~20mの細い平坦面が1~2mの段差で5段ばかり一状に連なっている。点々と瓦片も出土しており大正12年に出土した軒丸瓦は図のようである。「出雲國風土記」には記載されていないが、それによると他の寺院はその大半が郡司層であることから、本寺の造立者も仁多郡司の1人であった可能性がある。

(3) カネツキ免遺跡⁽⁴⁾：谷間に面した丘陵斜面にあり、工事により崖を切削した際泥土中から須恵器、土師器、木製品などが出土した。須恵器は壺・蓋・高壺・円面鏡などがあり、壺のなかには、「上備」「大」「小」「伴」「〇氏」などの墨書きが認められる。円面鏡は特に大型の優品である。面径23cm、脚径30cm、高さ12cmで脚部には長方形の透かしがあり、外部は円形浮文、竹管文などで飾っている。木製品では鳥帽子をかぶった人形の頭などがあり、7~8世紀ごろの寺院跡を思わせるものである。

(4) 琴枕古墳⁽⁵⁾：墳丘はかなり破損しているが、直径10m、高さ2m程度の円墳かと思われる。主体部は割石を用いた袖無型横穴式石室で、当地では普通に見られる様式である。石室の前方が一部破損しているが、現存長4.7m、幅1.1m、高さ1.2mの内法である。遺物は不明。

(5) 梅木原古墳⁽⁶⁾：封土はかなり流失しているが、直径8m、高さ2.5m程度の円墳であろう。主体部は箱式石棺様の横穴式石室である。玄室は扁平な割石1枚で築き、石室の全長3.2m、幅

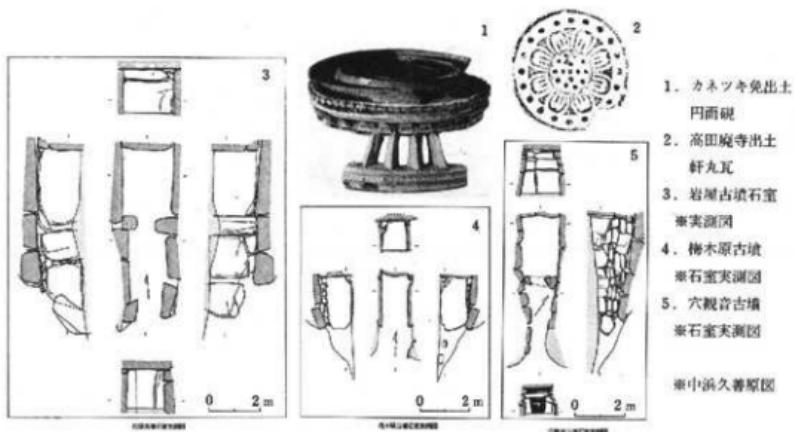


図3. 周辺遺跡資料図

1.05 m、高さ 1.2 mを測る。

(6) 仁多郡家跡比定地⁽⁷⁾：「出雲國風土記」記載の郡衙所在比定地。仁多町大字高川・郡村にあり、小字地名「大領原」（現況畠地）等から郡家跡と比定された。大正年間に郡家跡の碑を立てている。また、近くには字部地区の土産神である「大領神社」もある。

なお、このほかに仁多郡において玄門柱状石をもつ石室は、仁多町三沢の穴觀音古墳のみである。⁽⁸⁾
側壁に組み込まれている点で岩屋古墳のそれと異なる。

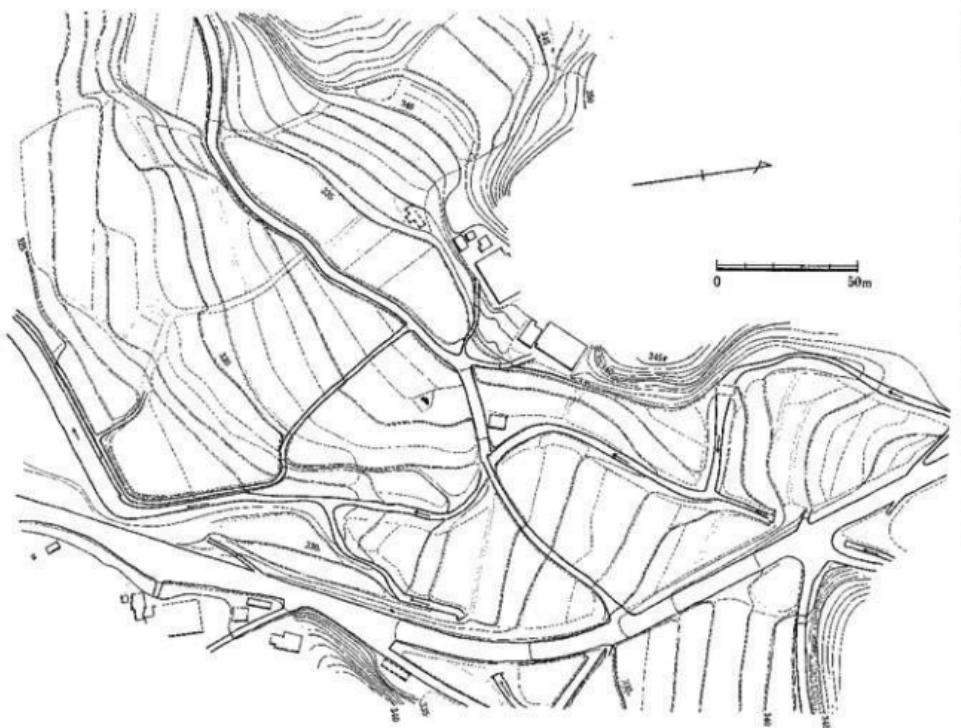


図4. 遺跡周辺地形図

III 古墳について

常楽寺古墳は現在では封土が完全に失われている。主体部の横穴式石室は側壁石積みの上部分が崩れかけており、それに天井石が支えられた状態で露呈している。

この主体部は、北西から張り出す丘陵の延長線上にあって、主軸線もほぼこれに合致する。石室は谷川側南東方向に開口しており、石室内部には暗黒色土が厚く流入堆積している。

調査は前年度に設けたトレンチCと、遺物の集中して出土する区域のA及びB調査区を生かしてトレンチを延長又は設けて、埴輪の確認や遺物の散布、埴輪片の取り上げ、等を行った。また、土体部については発掘を行わず、露呈した石室の外観から判明できる範囲で石室の観察と実測を行った。

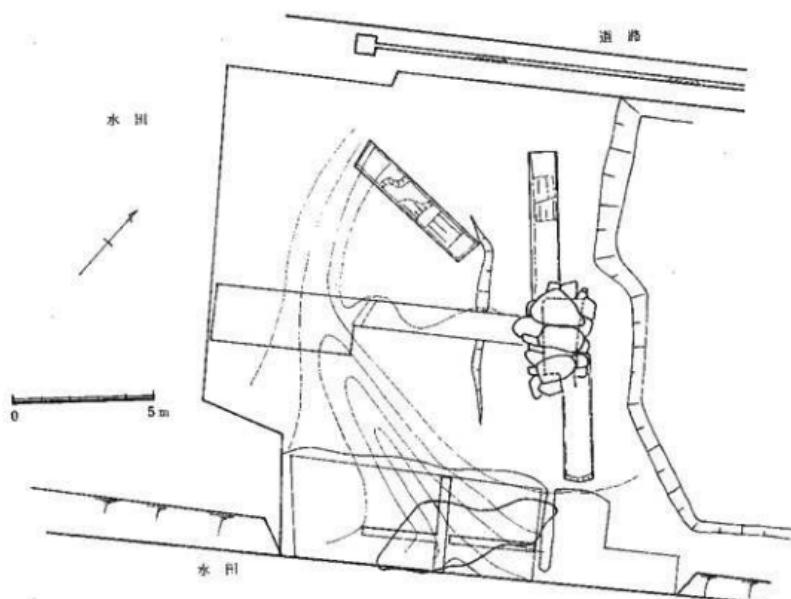


図5. 遺跡平板図

1. 主体部 (図6)

主体部は、クロボク質の旧地表土を削平した地山土に築いた横穴式石室である。主軸の方向はN42°30'Eで、天井石から約50cm下ったレベルでの玄室法量は、奥壁幅1.50m、奥行2.50m、入口部内幅1.20mであり、奥部が東北側に拡がった平面形を呈する。

玄室入口は整形の柱状石を立て玄門を造り、天井石より一段低く角柱状構石を刻している。玄門は上

部幅 52 cm、下端幅 56 cm、高さ 90 cm のわずかに上すぼみ形である。なお玄室の天井は玄門から約 60 cm 高い。

羨道部分は極く短く、玄門柱状石の前方に左右に幅約 40 cm の板状石をそれぞれ 1 枚づつ立てているのみで、天井部の架石は本来なかったのか不明である。

玄室内は調査していないが、壁面は切り石の半坦な面を立てて用い、その上に切石を後背部へ控えを長く小口積みにて設置している。この手法は側壁も奥壁も同じである。玄室の側壁は左右各 3 枚づつで天井石もそれに対応して 3 枚を用い、玄門帽石の上まで達している。奥壁は 2 枚で構成している。

なお、この石室の外側全体は大略、幅 2.5 m、長さ 4.0 m、高さ 2.0 m の構造であり、石室の基部となっている各石は原位置のままであると思われる。また、玄室の閉塞は玄門には見当らず不明である。

2. 墳丘

墳丘の範囲・縦線については、昨年度において石室の南側（A）と南西側（C）の各トレンチで、埴輪などの分布の実態を調査したのと併せて行い、クロボク土の地山が外側へ落ち込むことを認めていた。しかし充分に確認するには至っていないかった。

本年度はさらに次のようにトレンチを設けて検討した。

主体部長軸方向前方へ D トレンチ、後方へ E トレンチ、直交方向へ C トレンチを C トレンチに結び C・E トレンチの中間へ D トレンチを設けた。また昨年度埴輪片散布地域に設けた A 及び B 調査区の間の駐を D トレンチのほぼ延長とみなし、A 区では埴輪片取り上げ後に、その下に補助トレンチを直交して設けて観察した。

石室の北東側は約 1 m を残して深く削りおろして耕地になっており、地山面の追求も埴輪の検出もできなかった。

反対側南西方向 C-C トレンチでは、石室裏から削平したクロボク土の地山がほとんど水平に続き、石室中心より 8~10 m までの間は深さ約 25 cm の溝状落ち込みとなっている。

主体部縦断方向についてみる。先ず後背方向 E トレンチでは、奥壁石から約 2 m までは地山の削平が認められるが、それから約 1.5 m の間は工事に伴う重機の削り込みの痕がある。この石室中心から 5 m 地点付近では地山面が高くなっている。石室付近からの削平面は到達していなかったものとみられる。さらに同じく 5.7 m あたりから地山が落ち込んでゆくのが認められるが、6 m 以遠は今次の工事に伴って深く削り込まれて丹び押土が盛られており、8.2 m で現在の道路敷へと続くため、この地山の落ち込みが、はたして溝状のものであるか否かは検討できなかった。

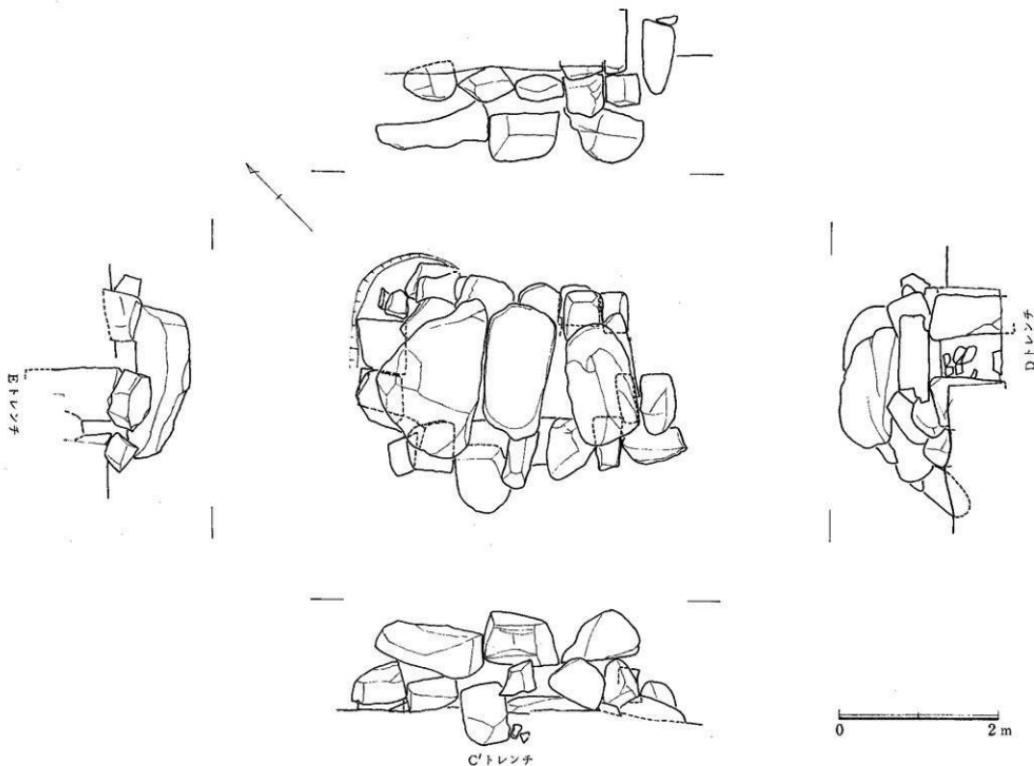


図6. 石室実測図

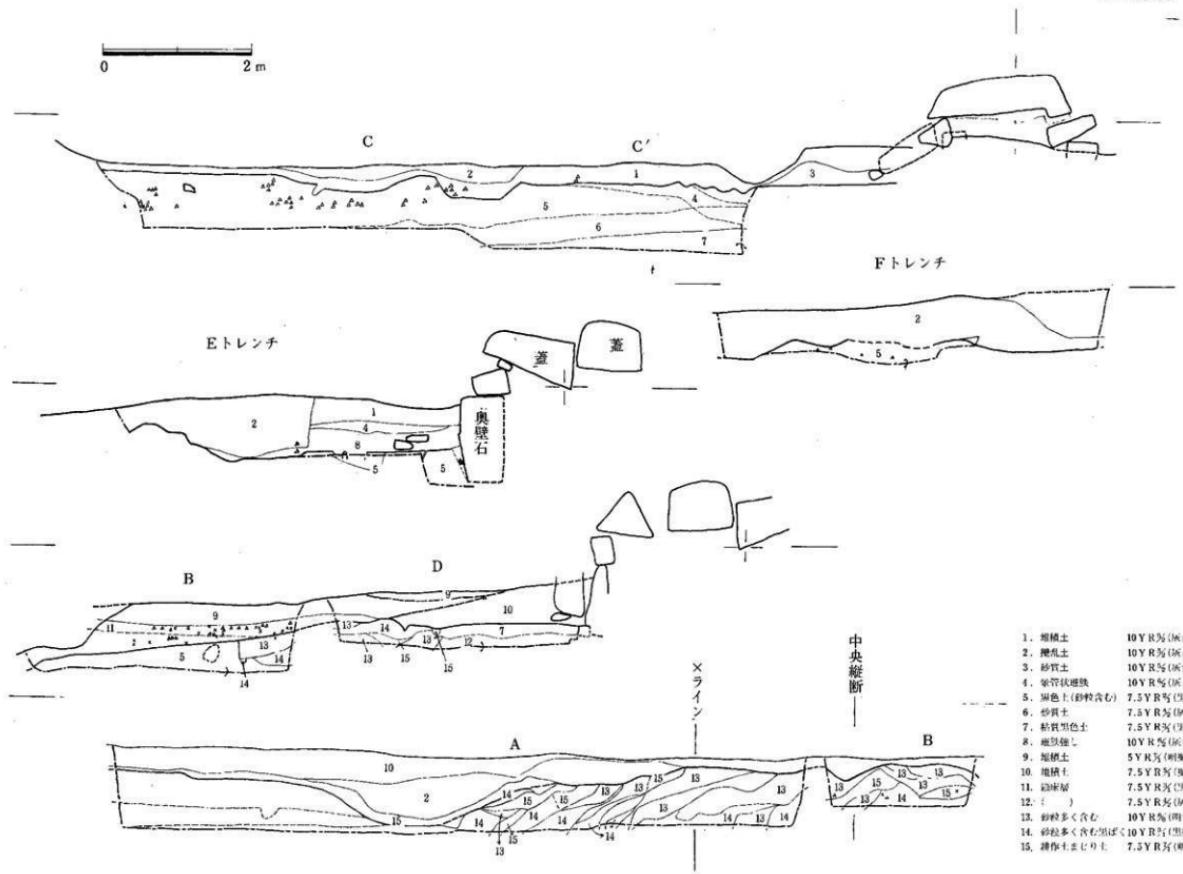


図7. トレンチ実測図

石室に近いあたりでは、削平された地山クロボク土の上に黄褐色土層が厚さ約30cmあり、奥壁石の裏側には25~30cmのやや平たい石が2個あり裏込め石を思わせる。また、その近くの地山面には直径7cmと15cmの杭状の穴があり、石室の側壁石を掘る作業に伴うものとも思われる。

石室玄門部から前方については、前庭部にあたる部位のDトレントと、わずかに角度がずれるがA~B区間の壁（Bベルト）とを続けて観察した。

石室の玄門柱状石から前方2.1mまではクロボク地山上の削平された面であり、そこで切断されて落ち込む。この落ち込み部幅2.7mをおいて再び地山面となるが、緩やかな斜面で前方に降下する。そして石室中心から9.40mから削られた急斜面となり落ち込みが認められる。しかし、9.55m以遠は今次の工事により削り取られており、溝状か否かは不明である。2.8m~4.8m位置の掘り込まれた落ち込み部は、黒褐色で砂粒を多く含む土層と、明黄褐色の砂粒を多く含む上層とが交互の斜層状に堆積し、深く掘り込んでのち再び埋め戻したように観察された。そしてこの位置までは上部が褐灰色上層が被っている。

そして石室中心から6m以遠では、地山土の上に流入又は堆積を示す黒褐色土が堆積し、その上面は水田耕作土と床層になっている。またこの土層は埴輪破片や須恵器片などを包含するものである。

石室に近い側の上層土は、上記のように褐灰色の薄い土層で、玄門柱状石の掘えられた状況からして、石室構築以来移動攪乱された形跡は認められず、石室中心から約5mの掘り込み埋土部の上にまで達していることから埴輪焼造の盛土と判断した。

なおこの土色は褐灰色であるが、石室後部Eトレントや横側Cトレントにおける地山土上の灰褐色~黄褐色土層と同一土層であり、水田からの滲透水の影響で着色変化が生じたものである。

石室中心から前方6m点でD~B線（主軸線）と直交するA~B調査区の北西壁面についてみる。

上軸線から南西へ約5mまでは既述のように埋め戻した深い溝部分の断面にあたり、明黄褐色~黒褐色の2~3種類の土層が斜めに層状の堆積で埋め戻した状態を示している。そしてこの堆積土の下には、地山クロボク土の下に位置する川砂層に達しているものと思われる。

続いて5.5m~7.0mまでの間は地山クロボク土が深く掘り回された溝状であり、7.0m以遠は地山土が伸びて上昇してほぼ平坦に続き、その上に表土が堆積しており、部分的に搅乱も受けている。

主軸線から北東方向へはB区壁面であり、約1.6mの範囲を観察したが、斜行する埋土の互層のみであり、△区のそれから連続したものであった。そして表面にわずかに表土がある。

CトレントとEトレントとの間に、さらにFトレントを設けて埴輪部位を確認しようとした。石室中心から西へ4mから9mまでの5m間についてのトレントで、石室中心から5.5mまでは地山黒褐色土が削平されていた。その外側は自然地山の高まりであり、6~8mの高い部分にあたるところは重機によるとみられる削り痕がある。そして8.3mあたりから傾斜して落ち込む様子が認められる。

しかし9.2m以遠は工事によって搅乱され、周溝状であるか否かは確認できなかった。だが、周溝とするならば位置的に妥当である。

また、この地山面の落ち込む位置が、石室中心からCトレンチで8m、B戸面で9.4m、Fトレンチで8.3m、さらにAグリッド壁面では約7.5mあたりの位置からである。いずれも幅約2.0~2.3mの溝状と判断され、これが墳壠をめぐる周溝とみられる。

これを図上にプロットして仮想線を入れると、石室を中心にして溝底位置が半径約9mの円を描く。またさらに各断面での地山レベルによって推定される等高線を記入すると、その周溝は旧地形にそって後背部が浅く、前方に深くなっている。(図5参照)

これらにより、本古墳は直径約16mの墳丘で、その外圍に幅約2m余の周溝が掘られた円墳であったと判断した。

332.40

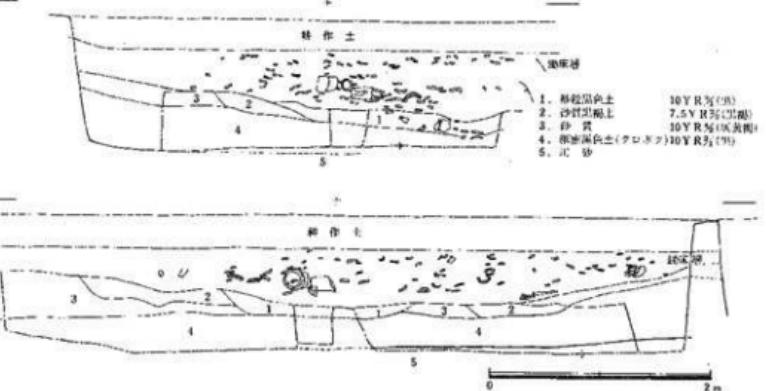


図8. A区補助トレンチ図

3. 遺物出土状況 (図9)

昨年度、工事中人物埴輪片が採取された地点を中心に、グリッドA及びBを設けて、その上層部分の緊急収上げを行った。しかし堆積した厚さがあり、その部分をさらに本年度において最下部まで行い、遺物を採取した。

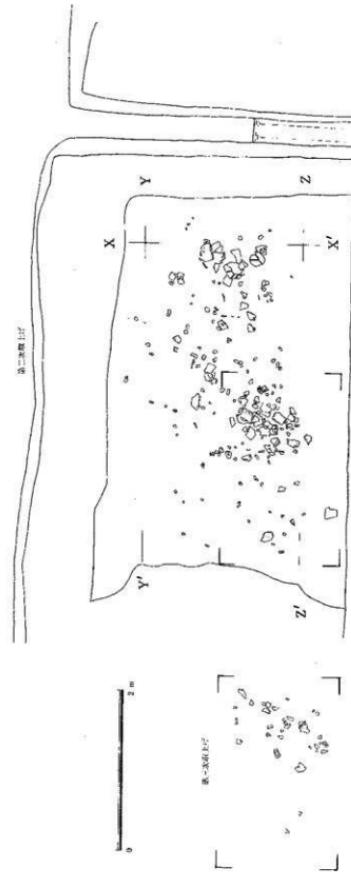
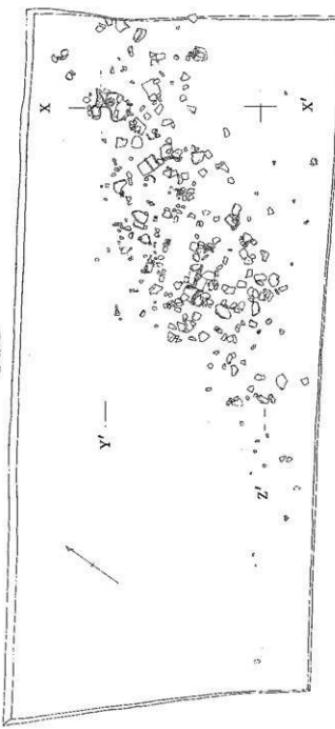


图9. 墓葬片出土状况 (A区)

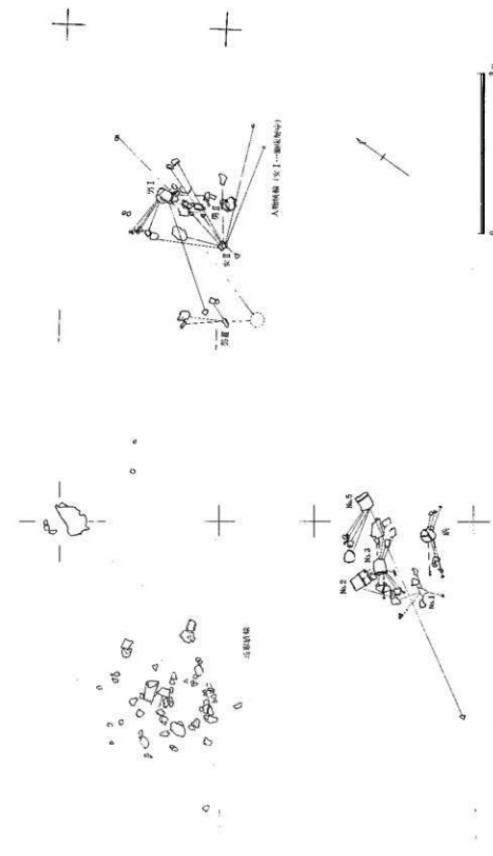


图10. 接合面元破片散布状况

取り上げは昨年度の基準を活用し、X-X線を基準に、両交するY-Y及びZ-Zを基線とした。このA区では埴輪の破片多数と、若干の須恵器片とか採取された。古墳主体部の入口前方6.5mあたりから南へ、地山の傾斜にそって、溝底に至る4.5~5mの間、幅約2mの部分に集中して堆積していた。

またCトレンチの地山上中からは極く細片になった縦文式土器を採取し、耕作下由部位からは若干の土師質土器片や須恵器片を検出した。

また、後述する円筒埴輪や形象埴輪、或は須恵器の後元接合した個体につき、その破片の散布状況を図示すると、図10のようである。

いずれの個体も、北側高位置から南側低位置の溝状地へ向ってはほとんど直線的に分布し、しかも破片は片状のものが高位に、塊状のものが低位に散布していた。つまり転がり易い破片がより遠くへ転落していることが判る。

これは本来位置していた場所が、分布の北端から近い位置=石室入口部前庭の、南側墳丘中腹あたりであったことを示している。そしてそこから何らかの行為によって投棄したものとみるのが妥当であろう。

表1. 出土遺物集計表（採取破片）

区分	埴輪計	円筒	人物	馬	不明品	須恵器	土師器	余生土器	縦文土器	その他	
A 区表採	196	148	14	34	29	47	1	1	6	1	281
A トレンチ	542	328	74	140	291	125	46		4	1	1,009
B トレンチ	33	33			36	47			3	8	127
C トレンチ	1	1			18	9	3	2	50	10	93
合計	772	510	88	174	374	228	50	3	63	20	1,510

IV 出土遺物について

1. 古墳墓造以前の出土遺物 (図11)

(1) 繩文式土器 Cトレンチにおいて、地山クロボク土層中から細片になった縄文式土器が出た。既に述べたように、このクロボク土層は上面が削平されて古墳の石室が築かれたもので、かつての地表土である。上器片の包含されている深さは概ね40cmまでの範囲であり、細片で散布している状況から、より西寄り高位の山麓に近いあたりからの流入かと思われる。

①は中津式の特徴のある磨消縄文で焼成良く、内面に炭化物の付着が認められる。②も同様と思われる磨消縄文である。③もほぼ近いものであるが、内面は黒褐色で磨き仕上げになっている。

④は内尚する口縁に近い部分で、地文の擬似縄文を沈線で区画し、櫛模きの鉈術状文を付けている。彦崎K Iの様式に近いものである。

⑤～⑨はいずれもやや薄手の精製品で、上記より細目の単節縄文を施文原体とし、沈線は狭く浅い。

⑩は内尚する口縁部の破片で、その端部は波状を成すものとみられる。これらはいずれも福田K II式併行である。

⑪は底部の破片で、⑫は外面を磨研した精製品で浅鉢形とみられ、⑬は粗製品である。

⑭～⑯はやや肉厚のつくりで、外面は横に搔き目状に荒く削っており、内面は横のナデ仕上げで、炭化物の付着したものとも認められる。口縁部⑭は内反りのもので、口唇外側に浅く狭い沈線をめぐらせ、⑯は口唇を荒く丸めた粗製である。この粗製土器は大形壺状の破片と思われる。

⑰～⑲は精製品で、中津式～福田K II式に併行するもので、縄文時代後期前半ごろである。特に⑮～⑯は島根県では崎が鼻式と呼ぶ一群であり、出雲部でも分布範囲の広いものといえよう。

粗製土器は時期的特徴に乏しいが、上記のように精製品の様子から同時期のものとみてよからう。

(2) 弦生式土器 墓輪片等が多數出土したA調査区で、これらに混じって3点を検出した。いずれも大形の壺の口縁部で、朝顔形に強く外反して開き、口唇が肥厚するものである。

⑳は特に大形で水平に近いほどに開き、口径38cmである。口唇に3条の凹線があり、口縁の下面側にも沈線を3条めぐらせていている。口縁内面は襷杉状にハケ目調整している。㉑も同様に強くひらく豪形土器の口縁部で、口唇はやや薄く、角度を交差させた斜めのヘラ刻目でX字文様をめぐらせていている。口縁外下面にはわずかなナデによる稜を1条めぐらせてている。口径は20.5cmを測る。

この奈良式土器の壺は大形であり、口縁部の文様等から弦生時代中期前半ごろの優品であったことがわかる。

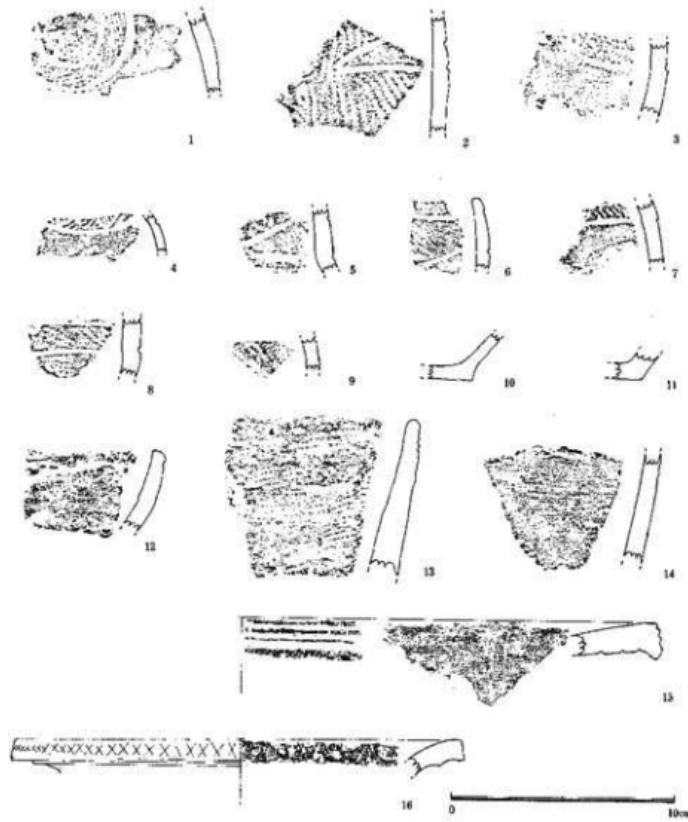


图11. 纹文·弥生式土器测图

このように、常楽寺古墳の営まれた付近は、縄文時代後期と弥生時代中期には人の生活の跡が残されており、その特徴には山陽地方の影響がみられるなど、中国山地奥部での古墳以前の様相の一端が窺われる。

2. 須恵器（図12）

須恵器はすべて破片となっており、そのほとんどがA・B区から埴輪破片に伴って出土した。須恵器破片は大部分が大甕形の胴部とみられるもので、内面の円形叩目が磨り消し様のものと、全く叩き放しのままの二種類があり、器壁はやや薄手のものがほとんどであった。

そのうち接合して器形を覗うことのできるものは、大甕1（口縁～肩部）、壺1（腋に転用）、蓋壺の壺の3点である。

（1）壺：蓋壺の壺では半分が復元できた。口径11.6cm、高さ4.8cmで、高さ1.4cmのたちあがりは内傾し、口唇端には内傾する小幅の削り面が認められる。受け部は水平に近いがわずかに上がり気味で、立ち上がりとの境は丸状の溝ができている。

底部は全体が丸味となり、体部の区分が明瞭でなく直線的に続いて受け部の外反部分となる。底部のヘラ削りは右回りを行い、のち外側約 $\frac{1}{3}$ をなでて仕上げている。内面は全面を回転指ナデ仕上げとしている。胎土は精選されたもので、器壁は比較的薄手に作っている。

（2）壺：ほぼ光形に復元し得た唯一の須恵器である。口径14.0cm、肩径17.4cm、器高22.6cmの甕形土器で、胴部に二次的に穿孔したとみられるものである。球形に近い胴部に外反しながら立ち上がる口頭部が付く。

底部はわずかに尖り気味の丸底で、体部下方まで叩き目が残り、その上はナデ仕上げとしている。そして胴中央の最大径部位から肩下までカキ目をめぐらせ、その中央位置に直径1.7cmの穿孔を行い注

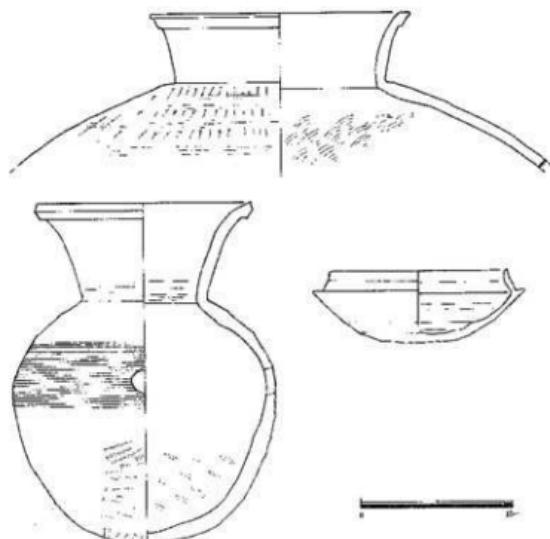


図12. 須恵器実測図

口としている。肩部はヨコナデ仕上げ、直徑 8.3 cm の比較的大きい頭部で、外反しながら約 6 cm 立ち上る。

口縁はさらに強く外反して外而に鋭い稜をなす口縁部帯を有する。すべて施文はなく丁寧なナデ仕上げである。

器壁は 7 ~ 9 mm とやや厚手で、胸内部面はわずかに円形叩目が判る程度までなで消している。胎土、焼成ともに良く、大型で丁寧な作りである。

(3) 麗：口縁部～肩部の形状が判る破片である。

胴径が 50 cm 以上にも及ぶとみられる大型品で、なだらかな肩部からして胴張りの高い姿であろう。肩部は叩目の上に浅く回転ハケ目を施し、接合して短く立ち上がる口縁部の直徑は 13.9 cm である。口縁部は 4.5 cm の立ち上がりで、わずかに外反して直線に近く開くもので、上端を平らにした口唇部に細い凸筋を付し、棱は丸味をもたせている。頭部は内外面とも丁寧なナデ仕上げである。

肩部内面は浅い円形叩目であり、ナデ消し等はみられない。

胎土は緻密で焼成も良く、淡い青灰色で、薄手の作りである。

以上 3 点の須恵器は杯については山陰での編年の中Ⅰ期に相当し、縁はより古い様相がみられる。大甕についても円面叩き放しの手法ではあるが端正であることから、あまり時代が降下するものではないだろう。これらのことからⅠ期の早い時期にランクすべきものと判断する。

このほか上飾質土器の細片を約 50 片採取したが、いずれも極く細片であり、かつ摩耗しており、特徴を検するに足らないものであった。表面採取のみであることから付近から流入したと思われる。

3. 円筒埴輪（図 13）

A 区に集中して出土した破片は、工事中の採取破片も含めて埴輪片が主であった。

接合復元できた普通円筒埴輪については次のようにある。（A10 及び A14 は人物埴輪の基台部とみられるので、これを除くものについて記述する。）

基底部の上に一段の胴部があり、上が口縁部となっていて、突常は上下 2 本のもののみである。

器高約 38 ~ 40 cm、口徑 23 ~ 26 cm、基底径 14.5 ~ 17.5 cm の小型で、わずかに外反しながら立ち上がる形態である。器壁は 1.3 ~ 1.8 cm の厚さで、わずかに砂粒を含むが良質の胎土で、外面は黄褐色を呈している。器体は粘土輪積みの手法が認められる。

突常（タガ）は上下の 2 条が付けられており、いずれも粘土輪貼付けで製作されている。この突常は上側の二面を指頭で強く挟み、下側は板状工具をあてて回転させ、整った断面方形で特に上稜が

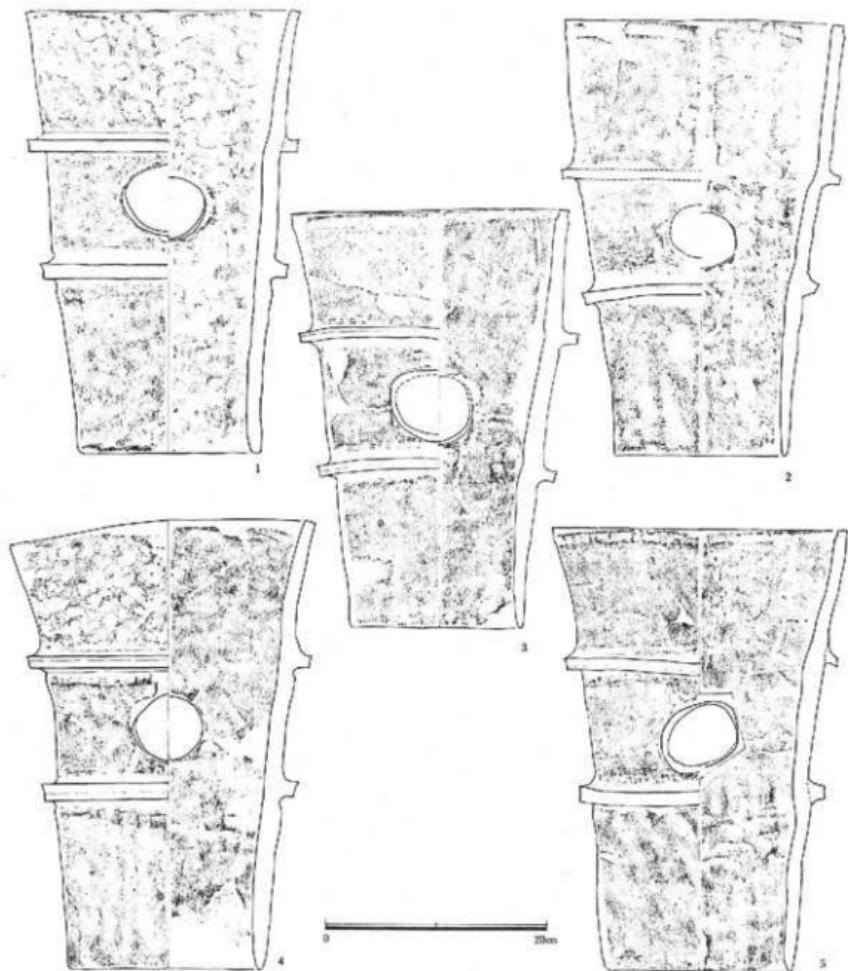


図13. 円筒埴輪 (1)

強く鋭くなっている。また、貼付圧着面は上面部が曲面をなして器壇に接続、下面部は角をもって器壁に接している。突帯巾は0.8~1.1cmで突出程度もほぼそれに近い。

スカシ孔は胴部に1対あり、右回りに一気に抉り、直径7.0×5.5~6.0cmのやや横に広い円形である。これらは器壁の第二次調整後に穿孔したものである。

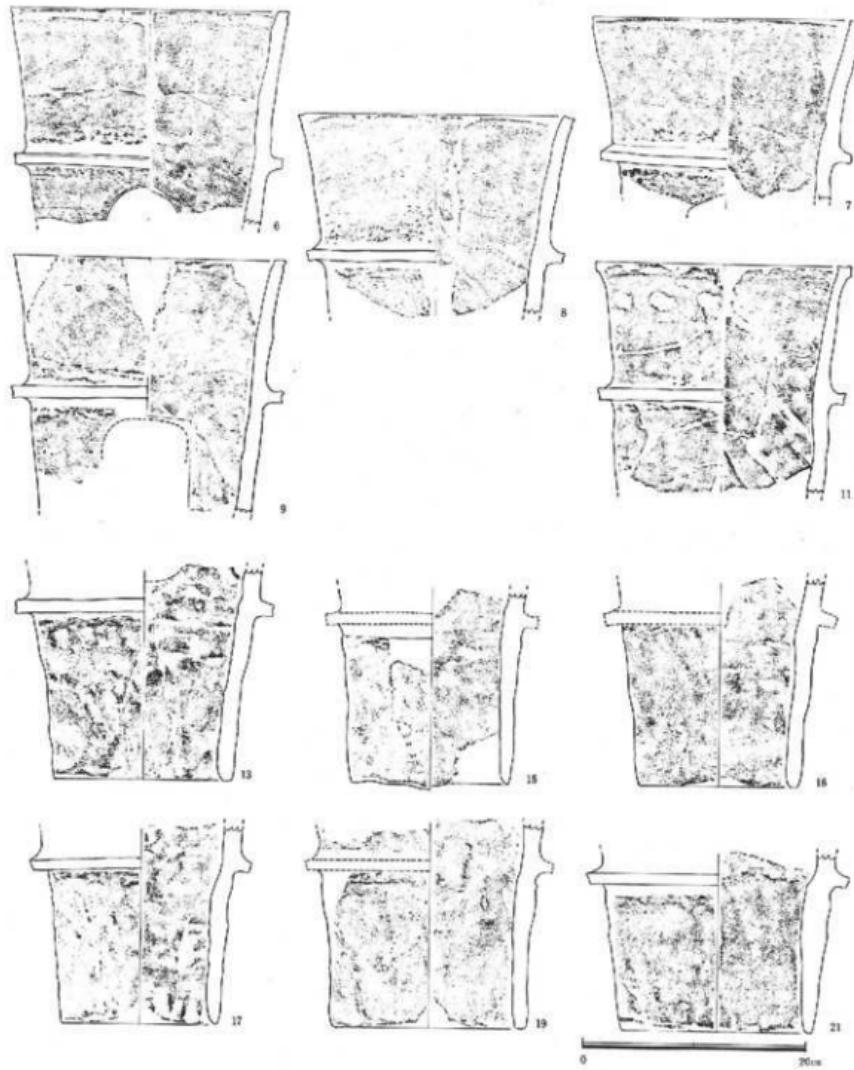


図13. 円筒埴輪 (2)

器壁外面の調整について概観すると、先ず口縁部はその端部を平面になでて平頭とし、内及び外側も同様にナデ仕上げしている。口縁部外には、口縁端近くで斜めになるタテハケ調整を行い、底部

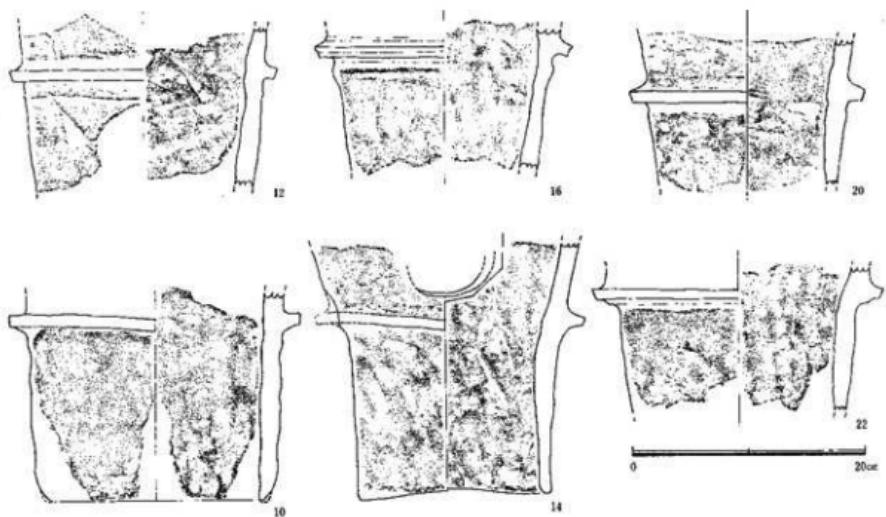


図13. 円筒埴輪 (3)

はタテハケ目の一次調整ののち連続ヨコハケの二次調整を行っている。

内側岐面の調整は胸部以上はハケ目調整である。これはハケ目状を呈する巾 $5.0\text{ cm} \sim 5.7\text{ cm}$ の木片を思わず工具で搔き均したものである。左下から右上へ斜めに搔き上げているが、口縁に近いほど水平に近く、脚下端では垂直に近い角度である。基底部内面は、同様に基底部へ向かって胴部下端あたりから直線的に強くなれて基端を薄くしている。

焼成はほとんどが良く、特に上方の焼けが強く、基底部はやや弱い。そしてすべて黒色斑は認められず、焼成方法が窺われる。

このように基底部は縱に近い急斜角度で、突帯の下あたりから基端へ強く指頭で削るようになでた指頭けずりで、基端は内側から薄くして丸くおさめているものが多い。

この調整は円筒埴輪を倒立して作業したもので口縁端に小枝状疣痕の残っているものもある。

また、基底部には部分的にタテハケ目の第一次調整痕が突出付近にわずかに認められるものもある。

以上から円筒埴輪の製作工程の概要を記すと、先ず粘土輪積み手法によって基部から積み上げ、その接合面は内外面とも指圧で下方に接着しながら所定の高さに整形する。

表 2 當麥寺古拉巴箇抽輪觀察表

《单(2, m)》

No	西高内低波孔尖端(タガ)										側面										色	調	防	土	簡	成	複合板片等その他	
	全高	外縁	側	脚	基盤	横柱	板厚	中	形状	口	側	外	面	内	面	本/2cm												
1	40.0	11.5	12.0	16.5	25.5	16.0	7.2	0.7	0.6	L.0	A	ヨコナダ	右下から 2次タグ	1次タグ	ヨコハ	右下から 2次タグ	ヨコハ	右下から 2次タグ	ヨコハ	指紋ケズリ のちナダ	16	19	25YR 7/6 級	砂粒少し	やや良	ややもろい	27.37.13E	基盤焼きされあり
2	28.2	14.0	16.5	14.7	25.0	16.0	5.3	1.1	4.9	4.2	0.9	A	*	*	*	*	*	*	*	17	21	25YR 7/4 級	砂粒含む	良	堅い	26.29.27.157.45	上半の脚部に焼	
3	37.3	11.0	12.3	14.0	24.5	16.0	7.1	1.2	1.0	A	*	*	*	*	*	*	*	*	20	25YR 7/4 級	砂粒わずかに含む	良	堅い	27.28.134.136				
4	38.5	11.5	12.0	18.0	24.5	17.5	7.6	0.7	0.6	A'	*	*	*	*	*	*	47下から ハタ	*	18	20	25YR 7/6 級	砂粒含む	良	やや硬い	A-赤	外面部剥落多し		
5	40.5	12.0	12.0	16.5	26.5	17.0	7.0	1.0	0.9	B	A	*	*	*	*	*	*	*	18	20	25YR 7/6 級	砂粒含む	良	堅い	19.17.23.28.133.149 三段階焼成、底厚 L.35			
6	-	13.0	-	-	25.0	-	(7.0)	6.0	0.9	A	*	*	*	*	*	*	*	-	20	SYR 6/6 級	*	良	堅い	(上半部)	上半部剥落、工具痕			
7	-	12.2	-	-	24.0	-	-	-	-	A	*	*	*	*	*	*	*	-	20	25YR 7/6 級	*	良	堅い	(上半部)	90.139.37.表抜			
8	-	12.5	-	-	25.0	-	-	-	-	A	*	*	*	*	*	*	*	-	18	SYR 7/4 級	砂粒少し	良	硬質	(口納部)	110.15.53.20.105.表 41.25.125.138.157.152.52			
9	-	12.0	(11.5)	-	24.5	-	(6.0)	(5.0)	1.0	A	*	*	1次タグ	右下から 2次タグ	-	*	右下から ハタ	*	19	SYR 7/4 級	砂粒わずかに含む	良	堅い	(上半部)	口部に枝あとあり			
10	-	-	(16.0)	-	18.0	-	-	-	1.0	A	-	-	*	*	*	*	*	-	16	SYR 6/4 級	形狀あり	良	堅い	(形狀底部?)	49 L.65			
11	-	12.0	(12.0)	-	23.0	-	-	-	1.0	A	ヨコナダ	右下から ハタ	1次タグ	ヨコハ	右からハタ	*	19	SYR 7/6 級	砂粒少し	やや不良	柔らかい	(上半部)	TL.29.48.表抜 門柱や内蔵					
12	-	-	-	(23.0)	-	-	-	6.8	0.9	A	*	*	*	*	*	*	-	18	25YR 7/6 級	*	やや不良	柔らかい	(病院)	50.11.15.表抜 内凹調整板				
13	-	-	-	16.0	-	16.0	-	-	1.1	A	*	*	*	*	*	*	*	-	25YR 7/8 級	砂粒含む	やや不良	柔らかい	(基部)	34.86.表抜				
14	-	-	-	15.0	-	16.5	-	-	0.8	A'	*	*	1次タグ	1次タグ 6.8	*	*	軽く指紋 ケズリ	8	~	25YR 6/8 級	砂粒わずかに含む	柔らかい	柔らかい	(形狀底部?)	75			
15	-	-	-	-	14.5	-	(1.0)	(A.45)	-	-	*	*	*	*	*	*	指紋ケズリ のちナダ	-	SYR 7/6 級	砂粒含む	良	柔らかい	(头部)	表抜				
16	-	-	-	(15.0) 以上	-	(15.0)	-	-	0.9	A	*	*	*	*	*	*	指紋ケズリ のちナダ	-	25YR 7/6 級	砂粒を含む	やや良	ややもろい	(基部)	表抜				
17	-	-	-	15.0	-	(14.0)	-	-	0.9	B	*	*	1次タグ	2次タグ	*	*	ケズリのチラリ	20	25YR 7/8 級	砂粒多く含む めぐらしき	やや良	ややもろい	(基部)	29.34				
18	-	-	-	16.0	-	14~15	-	-	-	-	*	*	指紋ケズリ のちナダ	-	*	*	-	75YR 6/6 級	砂粒含む	やや良	やや硬い	(基部)	50					
19	-	-	-	15.0	-	17~18	-	-	(1.0) (?)	-	*	*	1次タグ	2次タグ	*	*	*	SYR 7/4 級	砂粒あり	やや良	やや硬い	(基部)	表抜					
20	-	-	-	-	(7.0)	20	-	-	0.9	A	*	*	1次タグ	2次タグ	*	*	《トナデ》	*	SYR 7/8 級	砂粒まれにあり	やや良	柔らかい	(基部+脚部)	表抜				
21	-	-	-	14.0	-	(17.0)	-	-	-	1.1	B	*	*	*	*	*	*	-	25YR 7/6 級	砂粒含む	良	堅い	(基部)	表抜				
22	-	-	-	15.0	-	(35~36)	-	-	0.8	B	*	*	1次タグ	右下から 2次タグ	*	*	*	指紋ケズリ のちナダ	SYR 7/8 級	砂粒多く含む	柔らかい	柔らかい	(基部)	142.95.120.113				

带形状 A——△
B——▲
C——▲

調査・ハケ日 タテ
・指標ケズリ ヨコ
・ナデ

A 断続
B 一時止め連続
C 回転連続

次いで内面と外面の第一次調整を行う。内面基底部は指頭削り、それ以上は下から上に向ってやや斜めのタテハケ、外面は基底部上端あたりから上へタテハケとする。

そして粘土紐を巻き突帯をつくる。突帯は指頭に挟んで横に連続して引き、整形の断面台形とする。接着は内側から指掌をあて、下方に向っても力を加えて行ったもので、上面がやや内湾曲をなす接着である。このようにして上下2本の突帯を付け、突帯間の胴部はさらに第二次調整をして連続するヨコハケで一周する。従って一次調整のタテハケが一部に残る部分もある。

また、口縁部も右上がり気味のタテハケを重ねることも一部認められる。口縁部は内・外・上面の3面を指頭でヨコナデに整える。

基底部は倒立して調整を行っており、内面は指で外面は平板状工具で挟んで押圧し引き上げて基端を整えたものである。

胴部には一对のスカシ孔があり、第二次調整のうち右回り円形に抉り抜いて切り面を軽くナデ仕上げとしている。

ハケ目の密度は2cm当たり19～20本で、本遺跡の円筒埴輪（10・14を除いて）はすべて同じであり、同一又はそれに近い施工工具（木片か？）によるものとみられ、製作者が単一人か或は小人数の同一集団かと思われる。

10・14については、上記と異なる点が認められる。即ち器壁が厚く1.8cm以上であること、突帯の接着手法が上下逆になっていること、10はその直径が大きいこと、14は胴部が強く外反し閉くこと、そしていずれも調整ハケ目が粗で、上記円筒埴輪の巾2cm当たり19～20本に対し、10は15～16本、14は8～9本を数える。これは後述の形象埴輪の9～10本に近似するなどが指摘される。このことから10及び14は形象埴輪の基台部分ではないかと思われる。

円筒埴輪について川西氏⁽⁸⁾に準じて要約記述すると、外面調整は一次調整にタテハケ、二次調整にC種ヨコハケを用い、内面調整はオサエ・ナデ・ハケを用い、タガは突出度が高く退化していない。スカシ孔は円形1対で、タガは2段である。底部調整はオサエ・ナデを施し、二次調整を欠く外面には黒斑がない。川西氏編年のⅣ期に相当し、岡山山1号墳出土例等にやや近いが、口縁が外反しない点で異なる。また伴出した須恵器は、陶邑-TK10⁽⁹⁾に類似し、山陰でのⅢ期である。

4. 馬形埴輪（図14）

古墳前部、向って左側部分から転落又は投棄した状態で人物埴輪片等と共に網片で出土した。出土破片総数1,510片のうち馬形埴輪とみられる破片は174片で約11.5%にあたる。形象埴輪の内

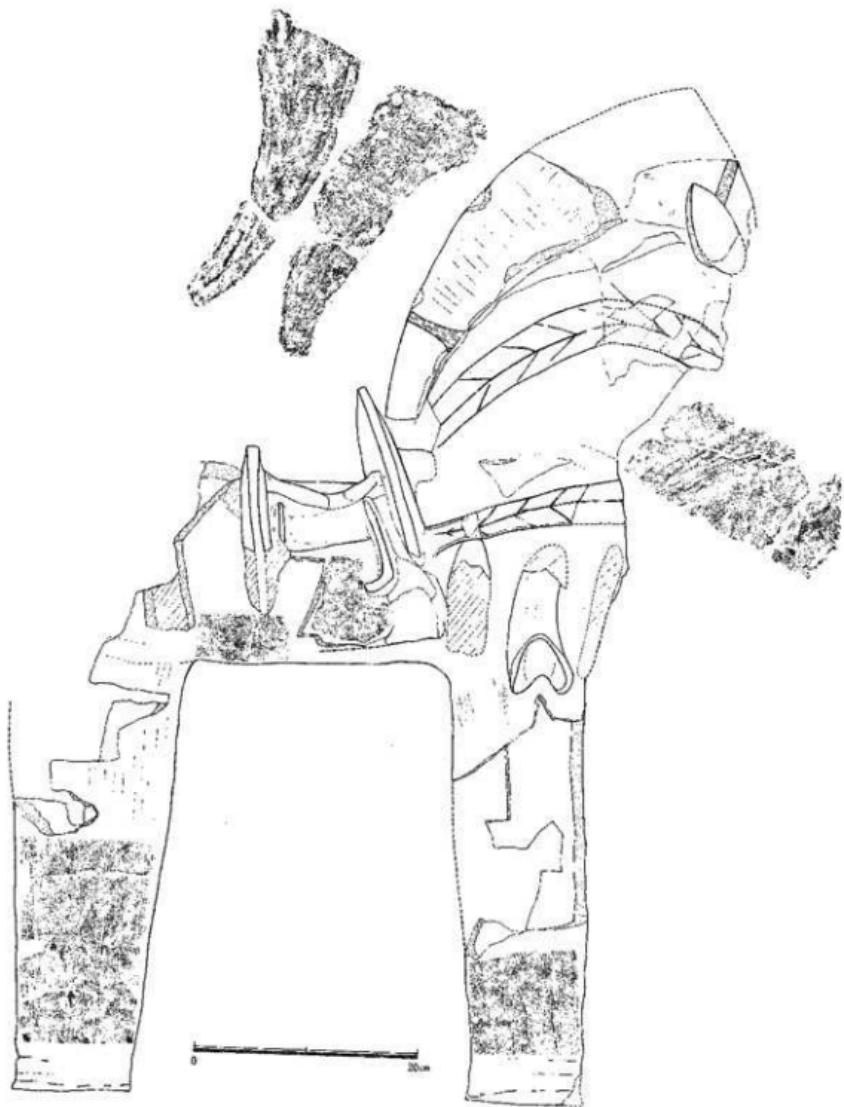


图14. 马形埴輪

では約 66.4 倍に相当する。

復元し得たのは頸部から胸部、そして、四肢部であり、頭部と復転についてはその破片が見当らなかった。

復元した姿は馬具を着け正装した飾馬である。各部位の計測値はたてがみの上端までの高さ 85cm、胸部巾 27cm、胸郭高 45.5cm、脚長 39cm、前後脚間距離 52.0cm である。

顔面は欠けているが耳は短く立ち、前たてがみの飾り結びではなく、立板状のたてがみは片面にタテハケ目を施しており、その端部は鞍の前輪に達し、綾杉文で表わした革帯状の面繋をつけ、手綱は鞍前輪まで表現している。また前輪から胸繋が付き、この胸繋には左右各 3 倍合計 6 個のつぶれた筒状の馬鐙が吊り下げられている。そして胸繋の下方の胸部中央前面に円形透孔を抉り貫いている。鞍は前輪がやや後傾気味で後輪は直立に近く、上すほろとなっている。居木は簡略してそれと知れる程度に付けてあり、鞍檜の表現は明瞭でない。障泥には地文ではなく前輪寄りの縫は粘土縫をし字形に貼り付けた稚拙な表現であり、おそらく塗縫であろう。後輪から尻部へ尻繩が出ているがそれは欠落している。

四肢はすべて先細りの円筒状で、上から下へ向ってハケ目調整を行っている。脚端の蹄の表現は明確でなく、自重による粘土上の褶曲がみられる。なおハケ目は 2cm 当り 9~10 本の密度であり、円筒埴輪のそれより極めて粗である。

このほか馬形埴輪の破片とみられるものとして(図 15)、脊輪板(9)は f 字形をなすもので、面繋の上に付けられていた刺離痕が明瞭である。表面の造作は省略され、何らの文様もない。

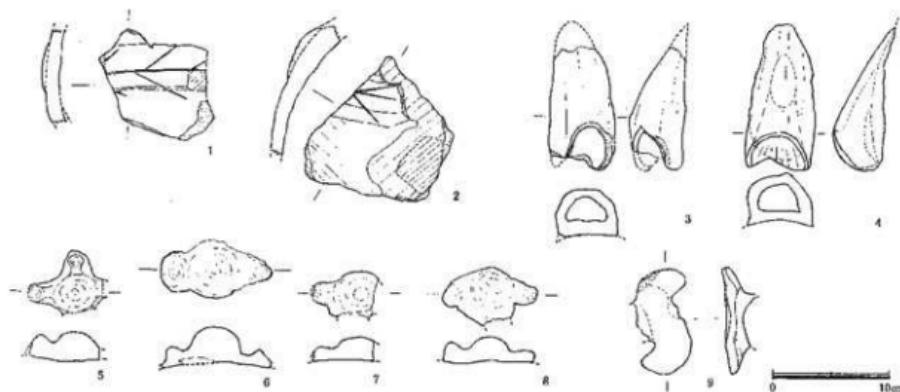


図15. 馬形埴輪破片

雲珠又は辻金具を表わすものとして(5)(6)(7)(8)がある。(6)はやや大形で直徑4.0cm、高さ3.0cmを測り、双頭に小珠が付いている。他の3点はほとんど同大同型で、直徑3.5cm、高さ2.3~2.5cm、三方に小珠を付けたものである。

また剥落した馬蹄の完形品が2個体と細片も5片が認められる。これは胸繩に吊り下げられるものと思われる。

そのほか革帶状の貼付けられた破片2枚、剥落痕のある脚様の破片もあるが、後轍であるのか頭~頭部であるのかは不明である。

この馬形埴輪は砂粒を含む胎土で、胴部は厚く約2cmあり側頭部では薄く1cm強である。全体に焼成は良く、上体部はほぼ橙色であるが後肢部は焼成が不良で表面に細かく亀裂が入っており、にぶい黄褐色である。

鳥取県内出土の復元された馬形埴輪では、半所窓跡出土の三体が焼かれているが、上記のように一見して相違しており、本例は例えば群馬・塙越り4号埴輪などにより親近をもつ。

5. 人物埴輪

出土した形象埴輪破片数の約34%が人物埴輪のものであった。この人物埴輪は男子3体、女子2体分が認められた。ここでは各々男子1号、同2号、同3号、女子1号、同2号の埴輪と記すことにする。

これらはほとんどが焼き上がりも良く、ほぼ橙色を呈するが、下腹部等には一部不良な部分が認められる。なお調整のハケ目はいずれも2cm当たり9~10木で、馬形埴輪と同じであり、円筒埴輪のそれより極めて粗である。

(1) 男子1号埴輪 (図16) 最も大きく復元し得た1体である。頭部から右足膝部あたりまで接合できた立像である。この高さ65cm、腰部から頭頂まで36cmで右腕が上膊部から折損している。

頭部は円形で短い鉗の付く帽子をかぶり、側頭部船子の耳の位置から欠失しているが美豆良が肩部まで垂れている。頸部は比較的太めである。首飾り等は認められない。顔面は鼻筋が通り端正である。口は大きすぎずほぼ木の葉形で上縁と下縁は抉り方向が逆である。

胸部は単純な円筒状でタテハケ日のみの調整であり、着衣の表現はない。腰に一周し前方で結ぶ帶があったものではほとんど剥落している。

腕は右の大半を久くが、左腕は腰の帶上に母指を上方にして掌をあて、肘を張っている。

腰帶の下端から着衣の裾が強く開くスカート状に付けられている。この裾部は大部分が欠落しているため、太刀やその他の吊り下げられたものがあったかどうかは不明である。

脚部の直徑12cmに対し大股部は大きく拡大されて幅36cmにも達している。下肢は欠けている

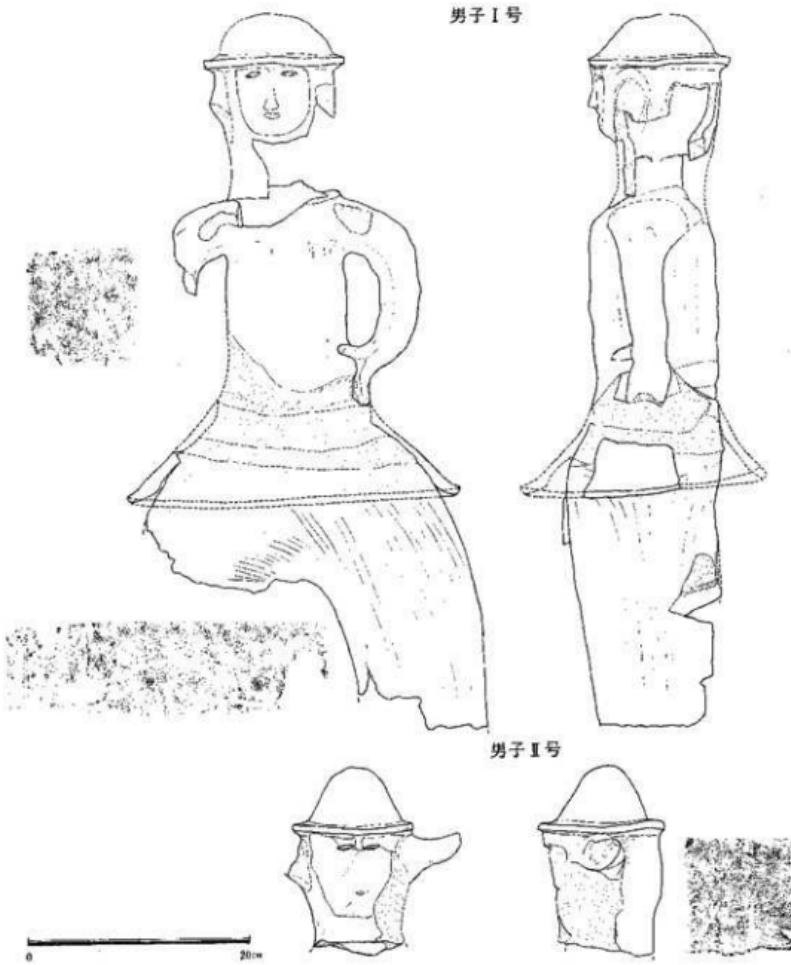


図16. 男子Ⅰ号・Ⅱ号埴輪

そのまま直立するものであろう。

そしてそのまま地面に据えられたか又は基台上に乗るのかも不明である。

また下半身の着衣についてこのままでは判断できないが、ズボン様のものを着けた表現であろうと
(13)類推する。

製作は先ず筒状胴部を作り、腕を付けてのち別作りの頭部をのせ、さらに別に作った下肢部を接合している。そして表面を胴部のタテハケと頭部のナデを施したのち、美豆良・指頭・ベルト及び上着衣の裾部などを加えて完成させている。なお裾部には部分的にヘラによる線描きがみられるが、何を表現したものかは不明である。

頭部は顔面部分から粘土紐の巻き上げで行い、頭頂部を最後に閉じ、錠を貼りつけてケズリナデ整形している。

下肢部は脚となる円筒2本をつくり、それを組んで上方をしばり腰部に適合するようにしている。脚部はタテハケ調整である。

内面はたてに指頭で強くなだら痕が明瞭である。

砂粒を含む胎土で、焼成は他のものよりやや弱く、橙色で下半身は焼がやや弱い。

(2) 男子Ⅱ号埴輪 (図16) 首部から折れた頭部部分のみである。残存高17cm、頭部幅11cmを測る。帽子は1号より円錐形中高で頂部は丸く、錠は短く一周する。貼り付けた顔面は剥落してほとんどが欠けている。

左側頭部の耳の位置である錠下端から上反する短角様の突起が付けられている。右側は欠落しているが、左側と同様であると判断される。これは束髪の表現であるとみられ、管見の限りでは類例が少なく、これも美豆良の一種でおそらく「上部美豆良」とよぶものではなかろうか。

製作法は1号の頭部とはほぼ同じである。側頭部の短角様突起は中空で先尖りにしたものである。帽子はなで調整されているが、後頭部はタテハケ調整である。

胎土は砂粒を含み、焼成は人物埴輪中で最も悪くややもろい。にぶい橙色を呈している。

(3) 男子Ⅲ号埴輪 (図17)

(1)は側頭部の破片であり、美豆良が付く。残存高15cm、美豆良長12cmを測る。着帽は1号とはほとんど同じ形態のも

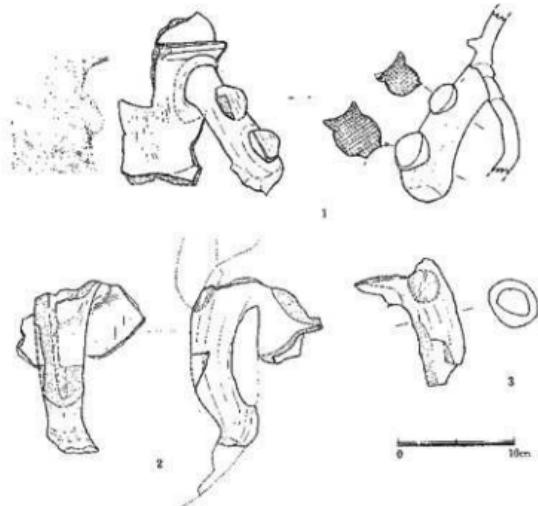


図17. 男子Ⅲ号埴輪

ので縫を付けている。帽部はヨコナデ調整している。製作は幅の異なる粘土を輪積みしている。厚さは1.0～1.2cmである。後頭部はタテハケ目で調整している。

美立良は円形棒状で下方が太く、2カ所に円形の貼付けを行って、縦に中央を凹ませ、結束の結び目を表現している。下端は肩部に接するもので剥離面が残る。

胎土は砂粒をほとんど含まず、焼きは良く堅い。明るい赤褐色である。

接合はできなかったが(2)と(3)は右腕右脚部と左上脚部であるが、この男子の部分であると判断される。

右腕部は肘を張り手を腰にあてている姿であり、指部分を全く欠く。肩部には美豆良の剥離した一部が見られる。

左腕は右に同じような下方に曲っている部分であり美豆良剥離面がみられる。いずれも中空の筒状で内面は縦じわ状でしづらの状況が判る。外面はヘラで削り整えている。

いずれも焼成は良く、褐色である。

(4) 女子1号埴輪 (図18) 頭頂の束髪の一部を欠くが、以下着衣の裳裾部の中心部までを接合復元した。高さ45cm、芯径24cmで両腕の中途からを欠く。

頭頂は欠けているが、残っているのは長方形平板状のものを戴せ、耳上から粘土絆で表現した髪をその上に上げている。両側の髪で頭頂において結ぶものとみられる。顔面は左上部が剥落しているが、やや上方から一刀で抉った瞳と口、直線ですっきりした鼻筋など端正である。瞳の抉りは切子埴輪と同様である。耳は粘土紐を貼付けて環状にしており、左右はやや非対称である。

後頭部と頭頂部はすべてナデ仕上げとしている。耳下部が最も大きく直徑9.6cmを測る。頸部は削に太く直徑7.6cmでタテハケ目仕上げである。

右腕は付け根で、左腕は手首部で折損しているが、ほぼ水平に前方へ出しておらず、何かを持つものと思われる。

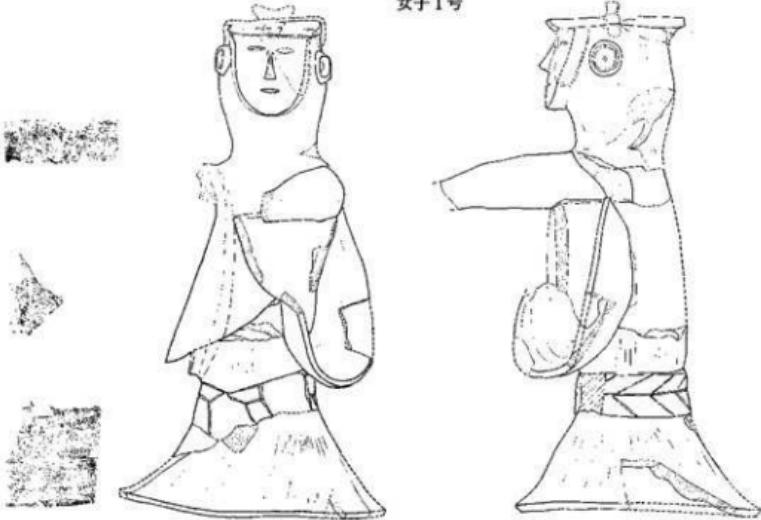
脚部についてみると、着衣については明瞭でないが、左右ともに肩から腋下・腰近くまで垂下した幅広の衣端が美しい曲線を描いて付けられており、意須比(15)に類する表現である。但し裳裾掛けの意須比に比べて、左右別々の掛け方に相違点がある。この点からすると貫頭衣のソデ部の表現ともみることもできようが、腋下の巾広い布の表現が特別であることからそれとは異質のものであろう。

脚部は単にタテハケ目で整えている。

腰には幅広い帯を一周させ、前中央をわずかに下げて結び目を表わしているものとみられる。この帯は貼付けてあり波杉文様としている点は馬形埴輪に共通する。

裳裾部は反りのあるスカート状で端部を反らせている。腰部の前中央部の結び目部とみられ

女子 I 号



女子 II 号

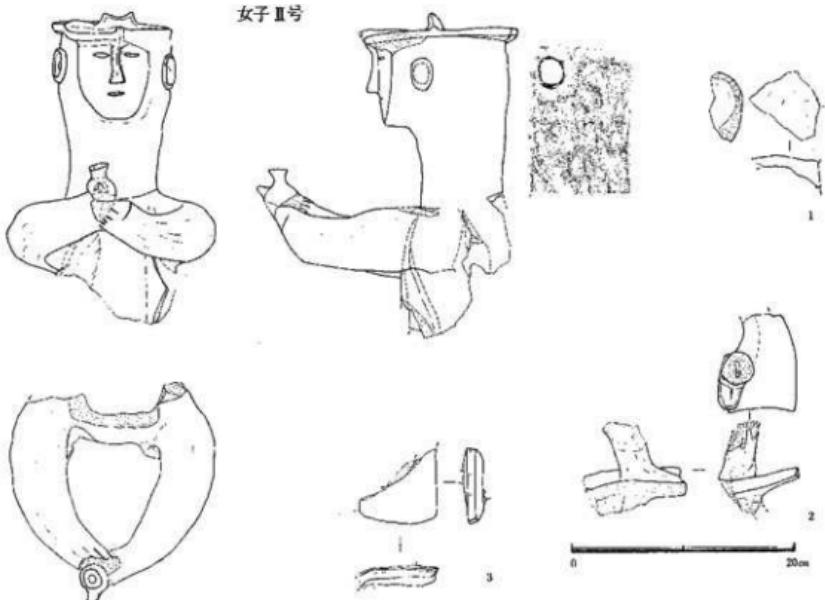


图18. 女子 I 号·II 号埴輪

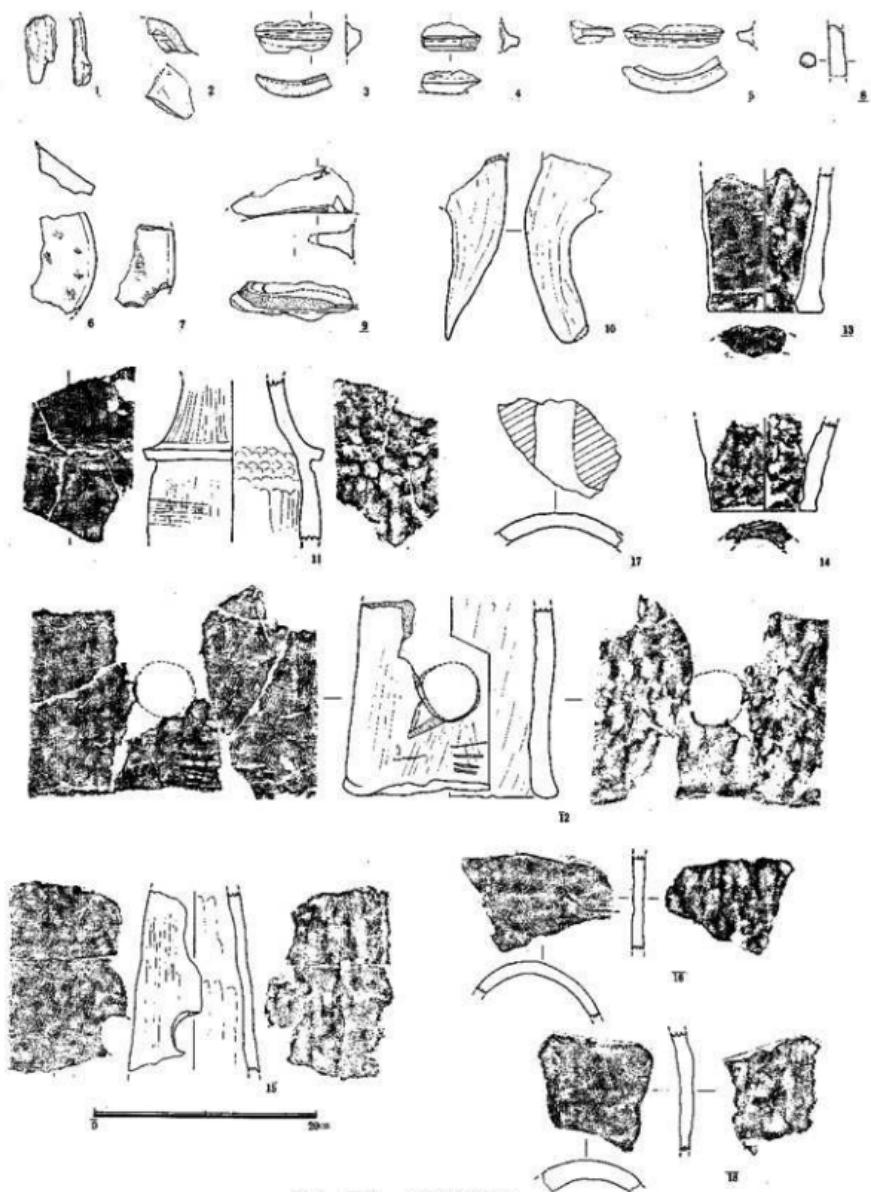


圖19. 馬形・人物埴輪破片

(16)
る直下に縦長円形の剥離痕があり、何らかの吊り下げた品が表現されていたと思われるが明らかでない。この袴裾部もタケハケ目で調整されている。

製作は円筒状胴部に頭部を付け、さらに下半身に続くものと思われるが欠失している。スカート部はこの胴部の上に巻き付けて作っている。この製作手法は既述の男子像と同様である。

(17)
脚部については不明であるが、おそらく荷座するものであろう。そして両腕は前方へ出し何らかを持つものと思われ、巫女の姿を表現するものと考える。

胎土には砂粒もなく、焼成も良く、橙色で堅い。

(5) 女子Ⅱ号埴輪 (図18) この女子像は「腰を挙げ持つ巫女」ではなく上半身を復元し得たものである。復元高23.5cm、最大幅17.5cm、差し出した手の先までの奥行23cmを測る。

頭部は破損が少なく、頭頂を長方形平板状にし、両側頭から髪とみられる粘土組を頭頂部で螺旋結びにしている。またこの結び目から額上中央面に連する紐状表現もあり、長方形蓄の髪形である。耳は環状の貼付けで表わし、顔面も貼付けて鼻筋高く作り、眼の抉りは他のものと同様である。

これらの製作法は他のものと共通している。後頭部や頸部はナデ仕上げである。

頸部は太目で両腕を前に差し出し、注口を前方にした麻を挙げ持っている。腕部はヘラ削りで仕上げ、手首と五指は細くヘラ線を入れて表現している。指頭は欠けている。

着衣は女子Ⅰ号埴輪の場合と全く同一で、左右それぞれ肩から腋下深く垂れ下げる曲線した、帯状が表現され、意須比とみられる表現である。但し右側のそれは欠落している。

胸部は単なる筒形で、なでているようである。

胎土に砂粒は少なく、焼成は良く堅い。

胴部以下については不明であるが、次に述べるように種々破片等や先例からすると、裳は強く外反し、台上に荷座するものと思われ、女子埴輪Ⅰ・Ⅱ号とも同様で円筒状基台の上に作られていたと考える。

人物埴輪の破片のうち(図18)・(1)は意須比の一部分で女子Ⅱ号の部分であろう。(2)は板状の台の上に置かれた左足が脛部で折れている。この足の角度から直立した人物ではなく、骨座した姿勢を示している。そして円筒状のものに筒状にとり付けられていた状態を示している。(3)は板状で、同様に円筒状のものに水平に付けられていたことを示しており、足台又は座板様のものと思われる。

この(1)～(3)はいずれもその焼成や色調から女子Ⅱ号埴輪の破片とみなされる。

(6) 人物・馬形埴輪の破片 (図19) ①はまっすぐに延ばした右手先部分で、荒っぽく手づくね状に作ったもので、腰帶の上にあてていたとみられる。これは男子Ⅱ号埴輪のものであると思われる。

②は男子帽子の部分で表面はナデ仕上げしてあり、焼成も良く、胎土などから男子Ⅱ号埴輪の部分であろう。

③～⑤は細身のタガ様の橙色破片で断面はほぼ台形をなしている。男子帽子の縁に似ているが、形象埴輪の基台円筒部にでもあたることも考えられ、所属は断定し難いが、これら形象埴輪の一部であることは間違いない。

⑥⑦は人物埴輪の裳裾部の破片で焼きの良いもの。表面にハケ目がある。男女いずれの着衣かも判別しかねる。女子Ⅰ号か男子Ⅱ又はⅢ号のいずれかである。

⑧は直径1.5cmの棒状で焼きはやや悪くもろい。おそらく人物又は馬形埴輪の部分かと思われるものである。

⑨は大きな円筒状の本体に貼付けられた底状の破片である。後述の人物基台部にでもつくものであろうか。砂粒多く焼成は不良。

⑩は先尖りの棒状の作りで、人物の右腕を表現した部分であろう。焼成がやや不良で橙～灰橙色を呈し、表面にはわずかに亀裂がみられる。内側にあたる面が特に焼きが弱く、おそらく胴部あたりに接していたものであったと思われる。手首部の表現もなく、くの字形にゆるく曲げて脇腹に下げた姿が想像される。男子Ⅱ号のものではなかろうか。

⑪のは円筒状基台である。円筒埴輪との相違点は多いが、特に器壁調整のハケ目が幅2cm当り9～10本で極く粗である点で異なる。

⑫は突帯から上部を強く絞った円筒状基部で、突帯下部は現存部分で直径15.5cm、絞った上端は9.2cmを測る。突帯は台形で整形であり、突帶上面は上方からの曲面にそって外反し、下面は強くヨコナデして凹巻をつくる。下方の台部はタテハケののちヨコなでを軽く加えたものであり、上方胴部はタテハケ目である。内面は押圧しながら指でタテナデを行っている。この上すぼみ部分が裳裾部の下に嵌入するとすれば、女子像の基台部と考えるのが至当であろう。

⑬は円形透孔をもつ円筒形基台で、基径約20cmの厚手のものである。作りは極く荒っぽく、外面はタテハケ、内面は指頭押圧又は圧ナデである。基端は自重によって押しつけられて直曲した部分がある。透孔は横径5.4cmでは圓形をなし、右回りに抉っている。高さ17cmで折損しているので突帯の有無やその上部は不明である。一般に人物埴輪の基台部に相似していることから類推される。

⑭は立位の脚端部である。接地する下端面は自重によって平坦となり、⑮では板日状痕が認められることから製作台が想像される。焼成は比較的良好、にぶい橙色である。この2点はその直径や外面タテハケ、内面指ナデ等の製作法も、馬形埴輪の場合と区別し難い。これは人物埴輪の立位男子像の足ではなかろうか。

⑯は片細い円筒形で小さい透孔があり薄作りのもの。外面はタテハケ目内面指頭たて削りで、焼成良く明るい橙色の堅いものである。ハケ目は2cm当たり9本を数える。

⑰もこれと同一のものの破片である。形象埴輪片ではあるが、馬形か人物かは不明である。

⑯もほほ同様の厚さや形状の曲面であるが、器表に左右対称になった剥落部があり、何か貼付けられていたのかは未詳である。馬形埴輪の部分かとも思われるが定かでない。

⑮は薄く作った円筒状の破片の一端で外方へ反るもの。内外面の調整は上記等と同様である。何らか他の部分との接合部位とみられるが判然としない。ハケ目は重複しているもののやはり粗であり、形象埴輪の破片であることは明らかである。

(杉原清一)

V ま と め

常楽寺古墳とその埴輪を主とする出土遺物について、次のような諸点が指摘される。

1. 常楽寺古墳は仁多郡衙の所在したとされ、遺跡密度の高い地域で、そのほぼ中心部にある。
この地方の後期古墳の多くは、丘陵上又はその中腹に営まれているのに対し、丘陵に位置しており、
⁽²⁰⁾他例との相違を示す。
2. この古墳は古くから封土が失われており、露呈した主体部は片袖型横穴式石室であるが、玄室内
は未調査である。仁多郡には玄門を作った古墳は岩屋古墳、穴観1号墳のほかには知られていない
⁽²¹⁾い。本例のように柱石の上にさらに角柱石を架した構築は例がない。整ったものであり、奥に長く
広い玄室で、狭道部の石組みを欠くものようである。
3. この古墳は墳丘を失って耕地となっており、西～南についてトレンチを設け、その墳堀を確認し
ようとした。わずかに残った溝状構造によって周溝とすると、石室を中心とする直径16cmの墳
丘で、その外に幅約2mの溝が掘りめぐらしてあったものと推定した。この墳形は正円ではなく
後背部がやや短いと思われるが確認できなかった。そして墳丘は旧地表を削平してのち盛土によ
って築かれていたことが判った。墳丘に造り出し部又は区画域の存在は不明である。造り出し
⁽²²⁾部があったとすると岡山県・中宮1号墳の直径18cmの円墳で、造り出し部があり、片袖式横穴式
石室を主体とするものが想起される。
4. 古墳前庭部の前方、向って左手あたりから周溝内へかけて局部的に多量の埴輪片等が堆積してお
り、円筒埴輪14以上、馬形埴輪1、男子人物埴輪3、女子人物埴輪2と須恵器を検出した。
出土状況から、自然の破損転落ではなく、器表のいたみが少いことから早い時期に人为的に投棄し
たものとみられる。
5. 円筒埴輪は退化していない突帯2段をつける小形品のみで、外面に二次調整を行い、肩部に一対
の円形透孔をくり抜いている。ほぼ畿内の編年Ⅳ期にあたるものである。
6. 馬形埴輪は顔面や後脚を欠くが、馬銜を吊り馬具を着けた飾り馬で、特に「」字形の鏡板があるこ
とから馬具としては古い様相を示すものとみられ、古墳出土の馬として県下で二例を数えるの
みである。
7. 男子人物埴輪3体はいずれも着相し、美豆良に束髪したもので、復元し得た1体は立像であり武
人を思わせるものである。頭部だけの1体の束髪はあまり類例をみない短角状であるが、やはり上げ
⁽²³⁾美豆良の一種と考えられる。
8. 女子人物埴輪は2体あり、いずれも頭頂を平板状にした長方形髪の髪形で、両腕を前に出し、1
体は腰を抜け持っている。下半身部分は欠落しているが荷座する姿になるものであろう。そしてこ

れらは巫女と判断される。

女子像の着衣の表現は簡略で、左右の肩からそれぞれの腋下へ通して巻く幅広の布が強調されており、袴姿衣や袴ではなく、他例とは少し趣を異にするが意須比を表わすものであろう。しかし、左右両方に着ける例は稀である。

9. 人物埴輪における眼と口の表現は製作者が最も意を用いたであろうことは容易に想像されるところである。この常楽寺古墳出土の5例中、眼の表現が観察できる4例はその製作方法がほとんど同一であり、同一人の製作を思わせる。眼の抉り方をみると、左右いずれも抉りの上縁は向って右から刃物を入れ曲線を描いて左へ引き、いったん刃物を抜きとり、次いで左から同様に下縁を描いて抉り貫いている。これによりあまり大きくなかった眼の形はほぼ木の葉形となり、右上部と左下部にアクセントのある形となる。この点からみると島根県・岩風後出土のそれとは著しく異なる。口は下方が曲線となる弓状に近くあまり大きくな。

(27) これら形象埴輪の調整ハケ目は円筒埴輪のそれより粗であり、明らかに施工工具と手法を異にしている。また円筒埴輪はそのすべてがほとんど同一手法で右利きの人によって製作され、人物埴輪は男女いずれも同一と思われる施工工具で調整され、しかも目や口の抉りこみの手法からしても、これはこれで同一人又は同一技術者の製作とみられる。

10. 墓輪片と共に出土した須恵器は線・环・大捷片等であったが、环の受け部の立ち上がりや大形で胴の太く口縁の立ち上がりの低い線・或は内面の円形叩目文のすり消しなどの手法から、山陰での編年Ⅱ期～Ⅲ期初段階ごろのものとみられる。

(28) 円筒埴輪はその手法から畿内での編年Ⅳ期に属するが、その末期ごろに位置すると考える。これは人物埴輪を伴うこととも矛盾しない。島根県下では岡田山の例に似るところもあるが、より古相である。

また馬形埴輪のF字形鏡板は島根県内では上島古墳とめんぐる古墳に例をみる以外になく、この(29) いずれも須恵器のⅢ期に比定されており、後期古墳では早い時期にあたる。

11. この埴輪と須恵器は石室前方向で左手側に局部的にまとめて出土したものであり、すべてその本来の位置を失っていた。しかし、破損の程度や分散の範囲から推察すると、その移動距離は極めて少ないものと考える。例えば石室前部左側で、埴丘の中腹位置のある狭い区画に、立て並べられていたもので、円筒埴輪14本以上によって囲まれた中に、馬とそれを引く男子(1号)や武人らしい男子(1号・2号)及び巫女2体が配置され、またそこには食物を入れた須恵器が供献されていたと想像することもできる。

特に正装に飾った馬や巫子像の頭を抜け持ち荷車するとみられることなどは、被葬者に対する葬送儀礼の状況とその精神文化が示されているものといえよう。

12. 以上のように常楽寺古墳は横穴式石室を主体とする後期古墳では早い時期に築かれたもので、須恵器編年によれば中期から後半期ごろ即ち6世紀前半ごろと推察される。そして被葬者に対しては種々の埴輪を供え、石室の構築にも、棺石のある整った玄門を築くなど、特別な配意がなされており注目されるところである。

そしてのちにはこの地が郡衙として栄えることも、すでにこのような文化度の下地を有していたことによると解すべきであろう。

またこの副櫛は何を基盤にするものかは全く不明であるが、耕地の狭小な山間地であることから米穀によるとは考えられない。やがて出雲国内での鉄の主産地として指摘され、またこの地域一帯の後期古墳では副葬品中特に鉄製刀剣類が目につくことなどから、この鉄生産が一つの要素となっていたと考えることもできる。また山陰山陽の接点の立地条件も考慮に入れるべき点であろう。

そして常楽寺古墳は横穴式石室の盛行に先んずる時期のものと思われ、後期古墳の展開を知る上で類例の稀れな形象埴輪とともに貴重な資料を提供するものである。

(連岡法暉・杉原清一)

註

- (1) 加藤義成：『出雲國風土記参究』 昭和32年
- (2) 門脇俊彦：『若屋古墳』『島根県大百科事典』山陰中央新報社 昭和57年
- (3) 連岡法暉：『高田庵寺跡』(2)と同じ
- (4) 仁多町教育委員会：『カネツキ免遺跡調査報』 昭和57年
- (5) 中浜久喜：『出雲地方における後期古墳文化の展開』『松江考古』4号 1981年
- (6) (5)と同じ
- (7) (1)と同じ
- (8) 川西宏光：『円筒ハニワ総論』『考古学雑誌』第64巻2号 昭和53年
- (9) 八雲立つ風土記の丘資料館所蔵品(実見による)
- (10) 田辺昭三：『陶邑古窯址群』平安学園 1966年
- (11) 島根県教育委員会：『重要文化財平所遺跡埴輪窯跡出土品復元修理報告書』 1981年
- (12) 群馬県教育委員会：『寒羽利古墳群』 1980年
- (13) 岡山県熊山町出土：「水玉文様のズボンの男」……岡山県下出土の少ないはにわのうちもっともすぐれたもの……とされている。「日本の美術」19巻 はにわ 昭和42年

- (14) 「群馬県地方出土の農夫像は、ほとんどが耳の上に短かく束ねたみずらで……」（梅沢重昭：古代史発掘7・埴輪と石の造形・P 61）とあるが、写真事例とは趣を異にしている。むしろ重文指定の「ひざまずく男子」像の角飾り帽子のほうが似たイメージである。しかし本例は帽子の下から出ていることから、上文のように突須良の一種とするのが至当ではなかろうか。
- (15) 例えば群馬県・塙廻り3号墳出土「倚坐する女子像」（群馬県教育委員会『塙廻り古墳群』1980）などにみられ、右肩から左腋下に巻いている。このように幅広の帯状の布を斜め方向に、肩から腋下へ巻くものとされているようだ。
- 「女子の祭衣で衣服の上につける。女子埴輪の右肩から右脇にかけた幅広の帯状の布がおすひ」（角井正道）ともしている。
- また「上代の原始的衣装の一種。腰横していない幅広い長い布で、頭からかぶり長く垂らした。男女とも使ったが詳細は不明。奈良・平安時代には婦人が神事に際して用いた。……」（角川古語辞典）など必ずしも明確でないが、大まかに女子が祭事に着用した幅広い帯状の布との見解によることとした。
- (16) (15)に掲げた塙廻り3号墳出土「倚坐する女子像」では鈴鏡を吊るしている。
- (17) (16)と同じ
- (18) (16)と同じ
- (19) (16)と同じ
- (20) (5)と同じ
- (21) (5)と同じ
- (22) 正岡勝人：「吉備」「考古学」M 10 雄山閣 1985年
- (23) 杉山晋作：「人物埴輪頭部における装身表現」「考古学」M 5 雄山閣 1983年
- (24) (23)と同じ
- (25) (12)と同じ
- (26) 島根県教育委員会：『岩屋後古墳発掘調査概報』 昭和53年
- (27) (8) 及び (12)と同じ
- (28) (8)と同じ
- (29) 門脇俊彦氏教示
- (30) 例えば『塙廻り古墳群』P 362・群馬室崎5号墳の項

主な参考文献

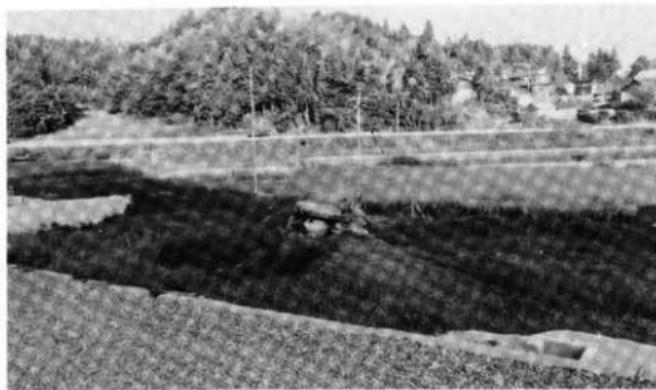
- 池田満雄・東森市良：『出雲の國』学生社 S 48 年
- 山本 清 : 『山陰古墳文化の研究』 S 46 年
- 加藤義成 : 『出雲國風土記叢考』 S 32 年
- 三木文雄 : 『はにわ』 日本の美術 N.19 至文堂 S 42 年
- 村井豊雄 : 『埴輪と石の造形』古代史発掘(7) 講談社 S 49 年
- 八雲立つ風土記の丘 : 『山陰のはにわ』(岡録) S 56 年
- 雄山閣 : 「裝身の考古学」特集『考古学』N.5 1983 年
- 雄山閣 : 「古墳の編年を総括する」特集『考古学』N.10 1985 年
- 群馬県教育委員会 : 『塚廻り古墳群』 1980 年
- 大阪府 “ : 『允恭陵古墳外堤の調査』 1981 年
- 川西宏幸 : 『円筒埴輪総論』『考古学雑誌』64 卷 2 号 S 53 年
- 井上寛光 : 『出雲の円筒埴輪』『松江考古』 1983 年
- 中浜久喜 : 『出雲地方における後期古墳文化の展開』『松江考古』N.4 1981 年



1. 遠 景
(南方より)



2. A区発掘前状況
(南方より)



3. 近 景
(西方より)



1. 発掘作業



2. 石室玄門部



3. 遺物検討



1. A・B区
表土除去



2. 人物埴輪出土状況



3. A区出土状況剝床層下面
(南西より)



1. A区出土状況
第一次取上げ
(南より)



3. 同上
(南西より)

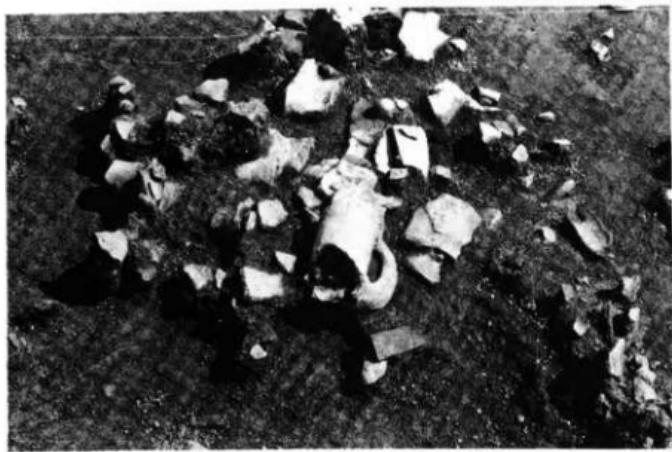




1. A区出土状況
第二次取上げ
(南より)



2. 人物埴輪出土状況
第三次取上げ



3. A区出土状況
第二次取上げ
(部分)



No 1



No 2



No 3



No 4

円筒埴輪



1. 馬形埴輪



たてがみ



丁字形鏡板



青珠・辻金具



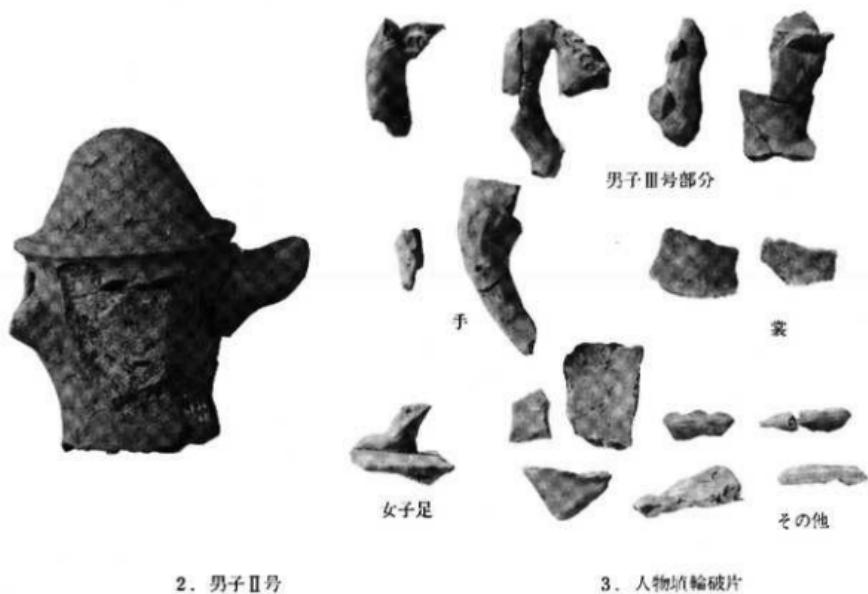
頭部



馬鐐・他



1. 男子I号



2. 男子II号

3. 人物埴輪破片



1. 女子I号



2. 女子II号



ハケ目

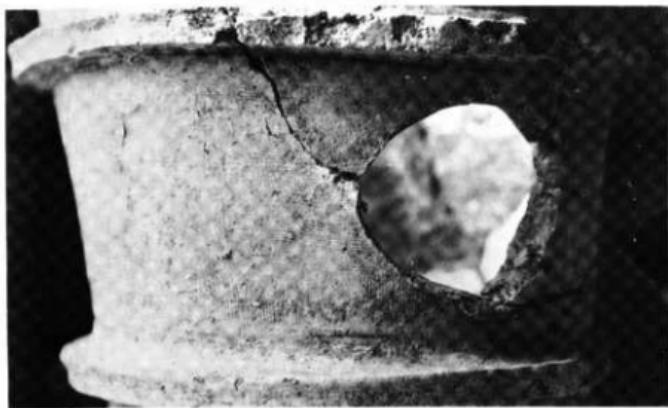
1. 男子 I 号



2. 女子 I 号埴輪



3. 円筒埴輪No.1



発掘調査報告書
常楽寺古墳

印刷 1985. 3. 10

(有)木次印刷

飯石郡三刀屋町三刀屋1635

発行 1985. 3. 15

仁多町教育委員会

仁多郡仁多町三成 358-1